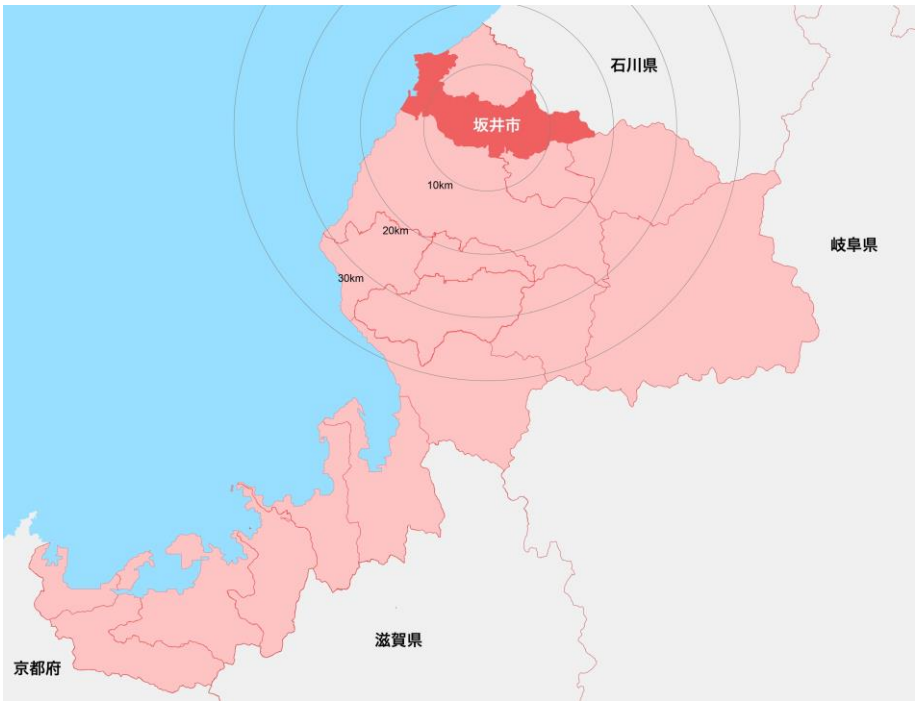
第１章　歴史的風致形成の背景

１．自然的環境

（１）位置

坂井市は、福井県の北部に位置し、県庁所在地である福井市から 10km ほどの距離にある。西は日本海に面し、北部にあわら市、北東部に石川県加賀市、東部に勝山市、南部に福井市および永平寺町に接する。東西方向には日本海岸から山間部まで約 32km と長く、南北方向は約 17km で、面積は約 209.67km^2 である。



坂井市の位置（国土地理院の基盤地図情報をもとに作成）

（２）地形・地質・水系

本市の東部には、加越山地の一部を構成する丈競山（標高1,045m）や浄法寺山（標高 1,052.9m）などの山々が連なっており、山頂からはほぼ市内全域の四季折々の表情ゆたかな姿を望むことができる。また、本市東部の森林地域を源流とする竹田川は、竹田地区をはじめ、坂井市内に豊かな水資源をもたらしている。

竹田地区を流れる豊かな水資源

南部には、九頭竜川が上流両岸を山岳地に挟まれるように流れ、河川敷や中洲の緑地と一体となって、潤いのある景観を作り出している。

竹田川・九頭竜川両河川に挟まれた中央部には、福井県随一の穀倉地帯である坂井平野が広がる。この坂井平野は九頭竜川によって運ばれた砂礫や泥が堆積して形成された肥沃な沖積平野であり、平安末期以降には九頭竜川から取水した水を坂井平野に点在する十郷に行き渡らせる十郷用水が整備され、水田地帯の中に集落が点在する農村景観が現在にも残る。

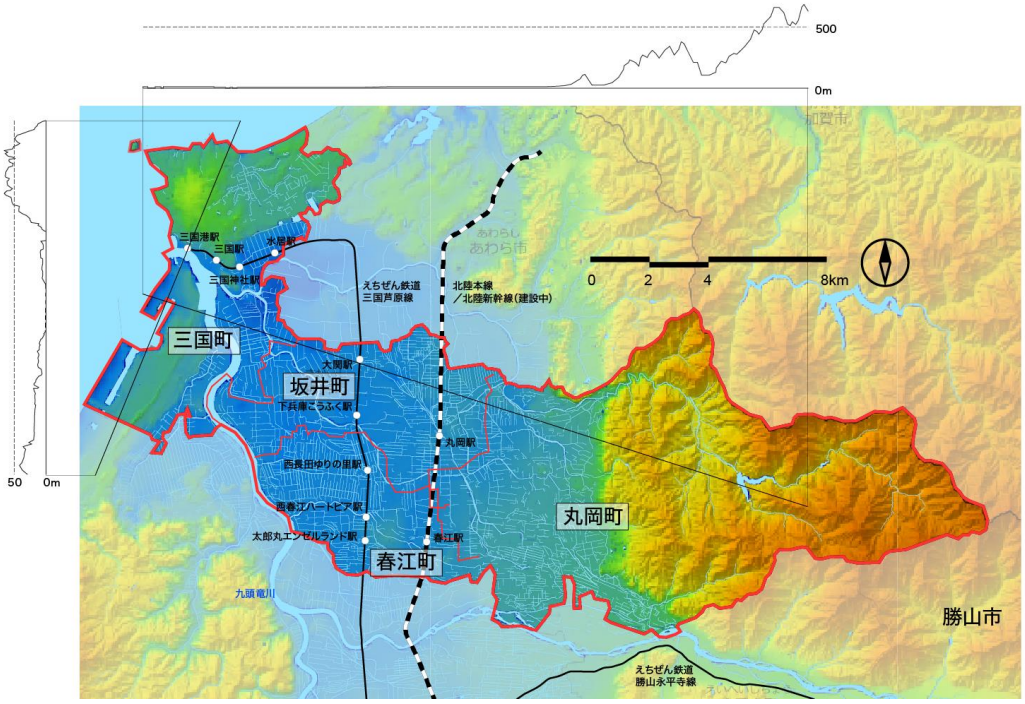
また、坂井平野には河川蛇行による自然堤防や後背湿地が分布しており、平野にはかつて沼地や葦原が多くあったと推定される。

西部には加越台地の西端にあたる丘陵地と砂丘地が広がっている。隆起性の洪積台地である加越台地は水源に乏しい地であったが、昭和 44 年からの国営総合農用地開発事業により約 1,000ha の畑地と九頭竜川からのパイプラインが整備された。九頭竜川河口付近には三国湊の市街地が形成され、北前船の寄港地として栄えた。砂丘地では、水はけの良さを生かしてらっきょうやスイカが特産物となっており、砂丘地特有の農業景観が広がっている。

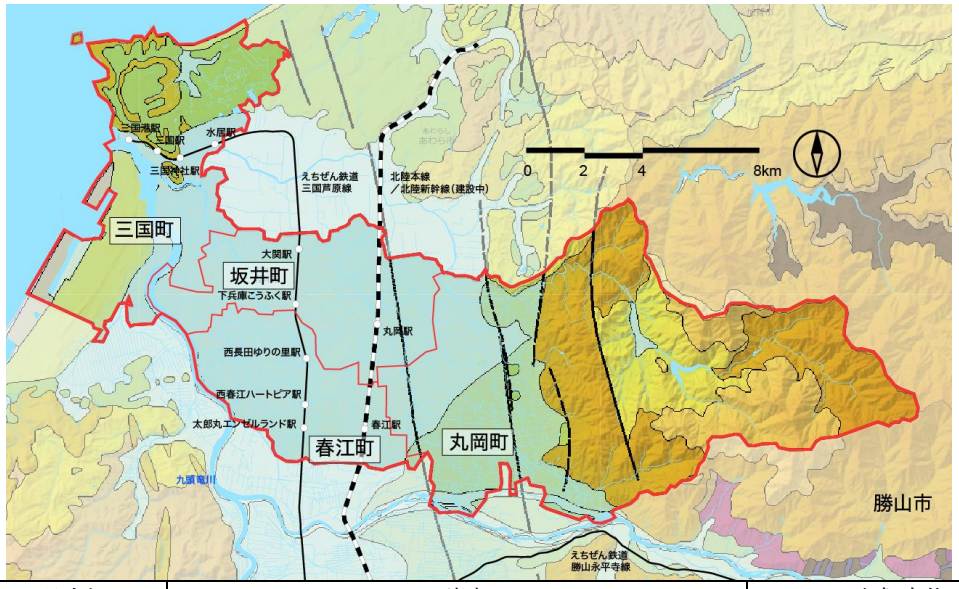
さらに海岸部沿いには世界有数の巨大な柱状の岩（柱状節理）が続き、国の名勝・天然記念物に指定されている東尋坊をはじめ、雄島と越前松島などを含む海岸区域が越前加賀海岸国定公園の特別保護地区に指定されている。この地域一帯では、巨大な柱状節理の海食崖が見られ、約 1,300 万年前の火山活動と思われる火山岩、火山砕屑岩、火山性堆積岩などが露出する。指定区域では多様な岩質が見られ、東尋坊ではデイサイト、雄島では流紋岩、越前松島では玄武岩質安山岩が見られる。また、

雄島と越前松島

火山活動で変動した地層では、断層やしわのように湾曲した褶曲（しゅうきょく）などの様子が見られる。そこに長年にわたる風化と浸食が繰り返され、現在の地形が形成されている。風光明媚な観光地としても知られ、多くの文学者や芸術家を魅了してきた。



標高図（国土地理院地図デジタル標高地形図（令和元年（2019）6 月）に加筆）



凡例	岩相	形成時代
	海岸・砂丘堆積物	完新世
	谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物	完新世
	盛り土・埋立地・干拓地	完新世
	扇状地・崖錐堆積物	更新世～完新世
	段丘堆積物	更新世
	安山岩・玄武岩質安山岩 溶岩・火砕岩	中新世
	汽水成層ないし海成・非海成混合層 砂岩，砂岩泥岩互層ないし砂岩・泥岩	中新世
	デイサイト・流紋岩 溶岩・火砕岩	中新世

地質図（20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2 に加筆）

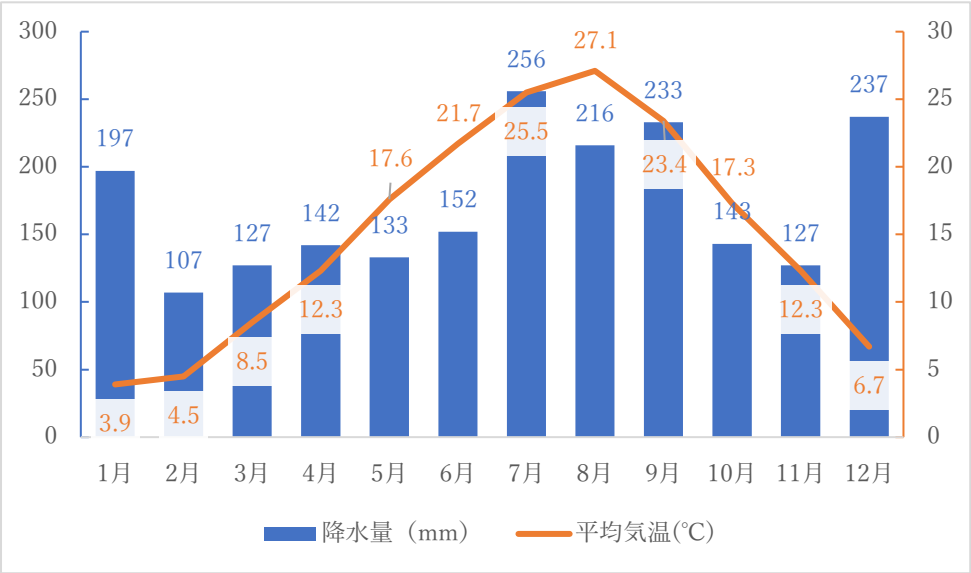
（３）気象

本市は、冬季に曇りや雪が多い日本海式気候に属す。山間地域においては降雪量が多く、海岸域の積雪量は極めて少ない。三国海岸一帯では、冬になると北西の季節風によって大波が激しく打ち寄せ、東尋坊などの荒々しい海食崖や海食地形の形成の原因となっている。

平成 30 年（2018）から令和 4 年（2022）までの 5 年間における年間降水量の平均値は 2,070mm、平均気温は 15.1℃となっている。月別の推移では、降水量は 2 月が 107mm で最も少なく、7 月が 256mm で最も多い。また、平均気温では、8 月が 27.1℃で最も高く、1 月が 3.9℃と最も低くなっている。

	最深積雪量	1 日最高降雪量
12 月	8.6 cm	11.2 cm
1 月	34.4 cm	16.8 cm
2 月	16.2 cm	6.4 cm
3 月	0 cm	0 cm

積雪量と降雪量の直近 5 年間の平均値（平成 30 年（2018）～令和 4 年（2022））
坂井市統計年鑑（観測地点：坂井町宮領）をもとに作成



月別降水量と月別気温の直近 5 年間の平均値（平成 30 年（2018）～令和 4 年（2022））気象庁ホームページ（観測地点：三国観測所）をもとに作成

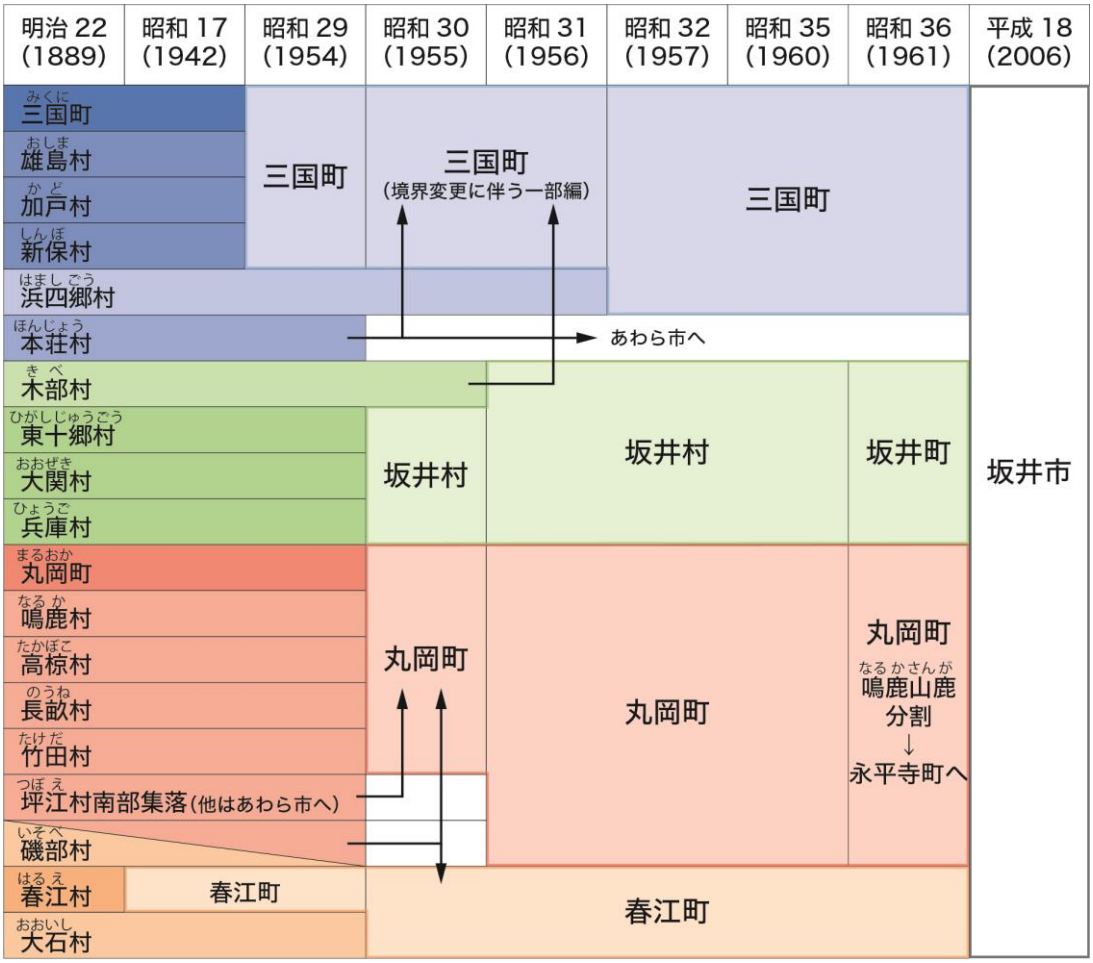
２．社会的環境

（１）市町村の合併経緯

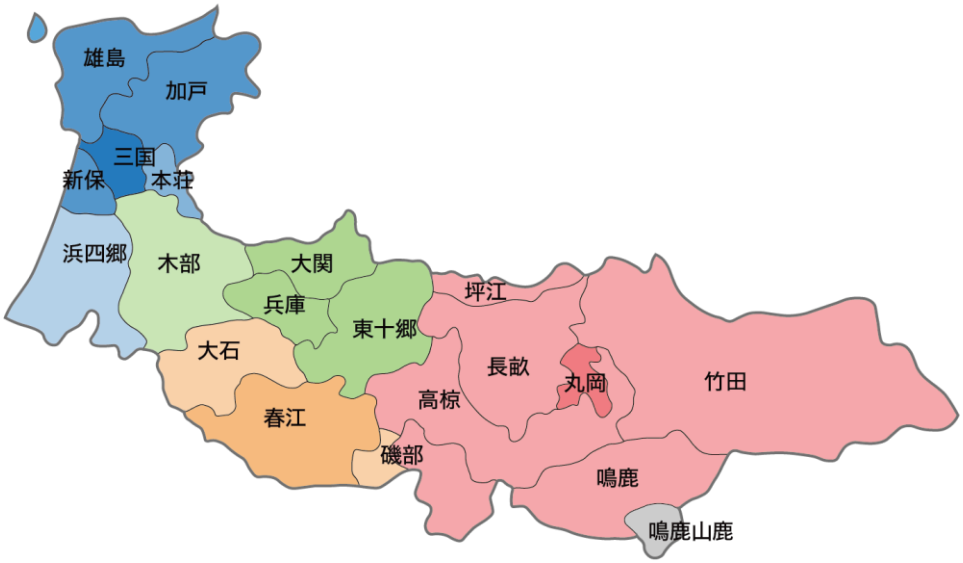
町村合併については、明治 21 年（1888）の市制・町村制の公布後、旧来の町村を新市町村の大字としたことから、明治 22 年（1889）4 月に下表の町村となった。

昭和 17 年（1942）に春江村は春江町となった。昭和 29 年（1954）には、雄島村・加戸村・新保村が三国町と合併した。昭和 30 年（1955）には、磯部村の一部と大石村が春江町と合併し、鳴鹿村・磯部村の一部・高椋村・長畝村・竹田村が丸岡町と合併した。また、東十郷村・大関村・兵庫村が合併して坂井村が誕生した。

木部村は昭和 31 年（1956）に坂井村と合併するが、翌年、木部村の北部に位置する 15 区は三国町に編入し、浜四郷村と共に三国町となった。さらに昭和 36 年（1961）、坂井村が町制実施となり、坂井町となった。平成 18 年（2006）に三国町、丸岡町、春江町、坂井町の 4 町が合併して坂井市が誕生した。なお、合併後この 4 町名を残し、現在も住所に町名を使用している。



坂井市の合併経緯



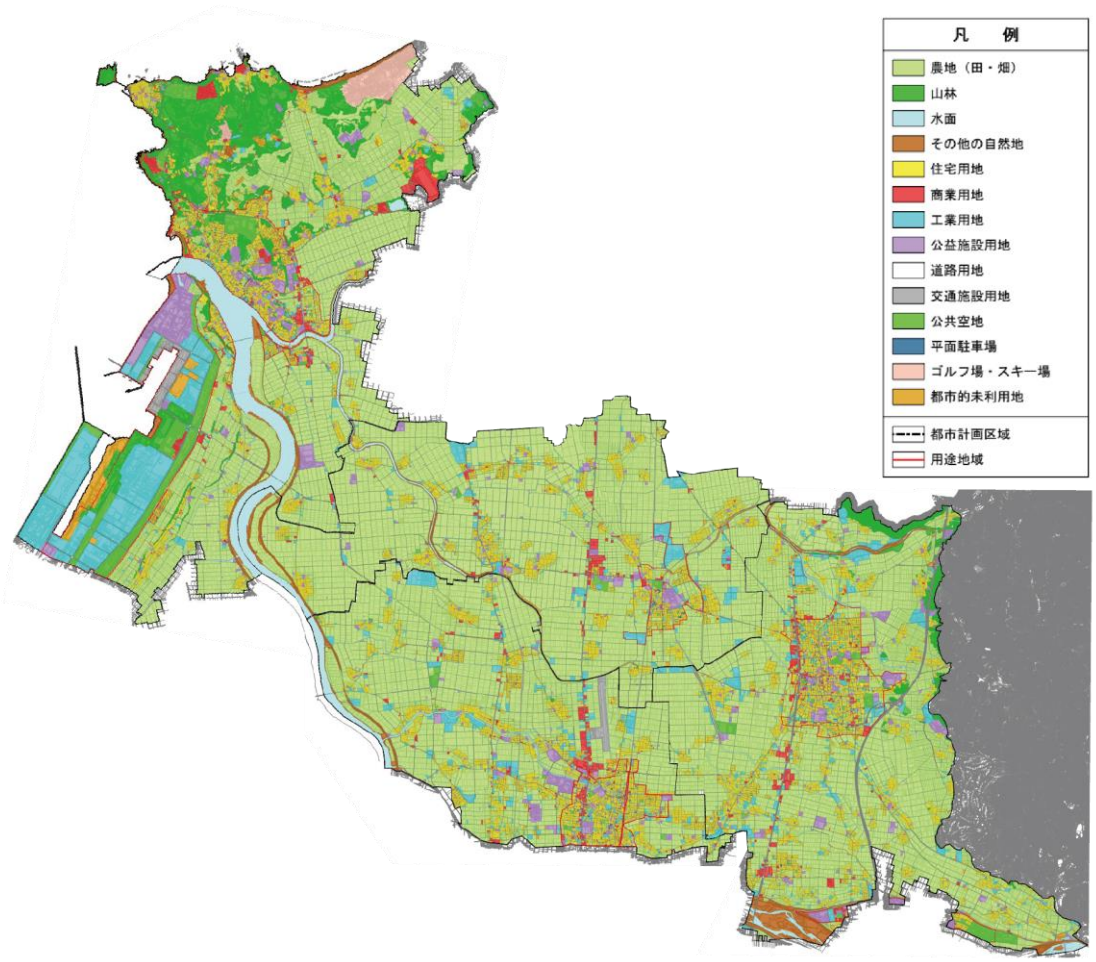
坂井市の旧町村の位置（『福井県史　資料編 17　統計』をもとに作成）

表　旧４町の人口

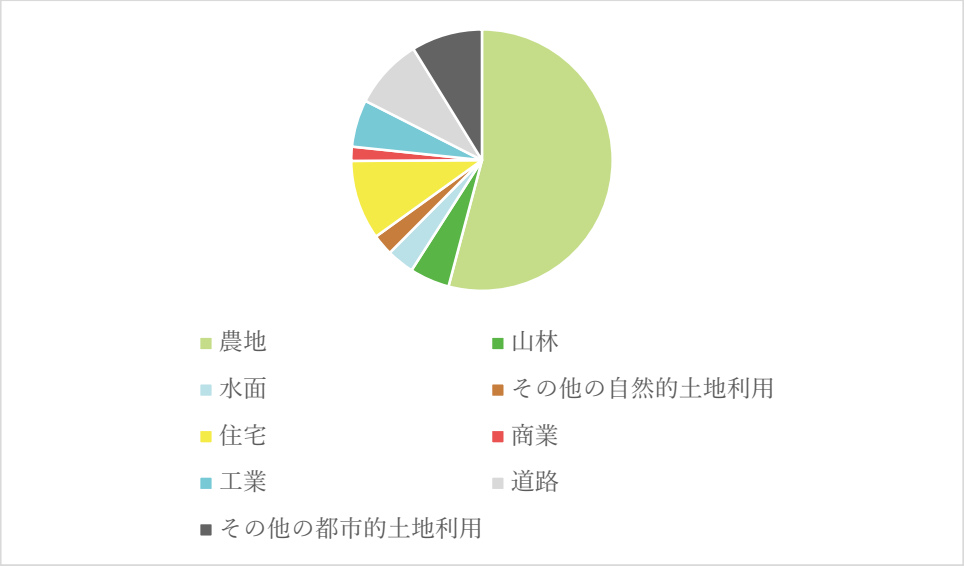
	平成 17 年（2005）	令和２年（2020）
旧三国町	22,936	20,176
旧丸岡町	32,461	30,728
旧春江町	23,968	25,152
旧坂井町	12,953	12,425

（２）土地利用

嶺北北部都市計画区域の総面積 13,642.8ha のうち、土地利用の割合は、田畑などの農業的土地利用が 54.1%を占めており、豊かな自然環境に包まれている。坂井平野は水田地帯として福井県内で最も土地生産性の高いことに加え、ガン類・カモ類・ハクチョウ類も確認され、鳥類の生息地としても重要な役割を果たしている。冬季には国指定の天然記念物であるヒシクイとマガンが飛来する。都市的な土地利用では、宅地が 9.8%、工業用地が 5.8%を占める。



坂井市の土地利用（平成 28 年度（2016）嶺北北部都市計画基礎調査）



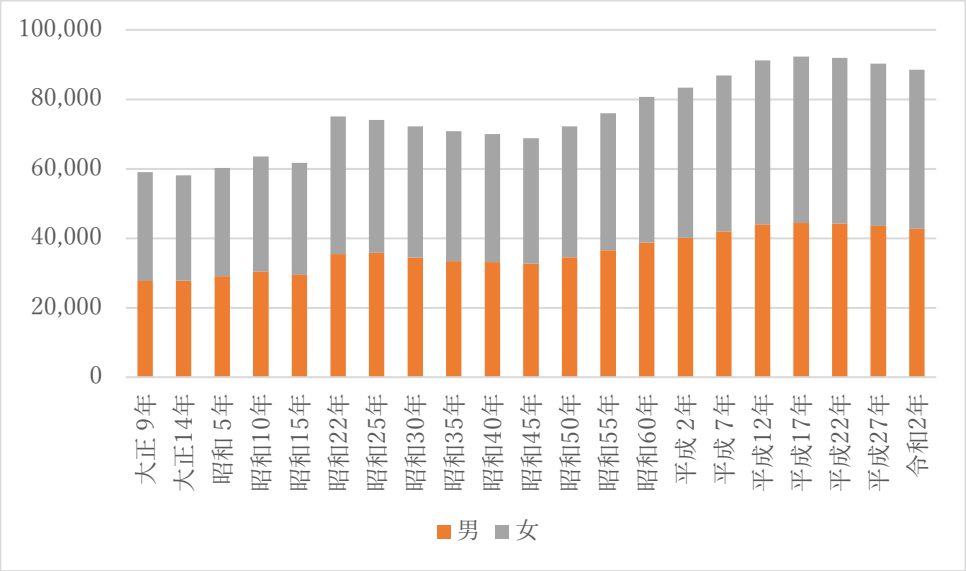
坂井市の用途別土地面積の割合（令和４年（2022）坂井市統計年報）

（３）人口動態

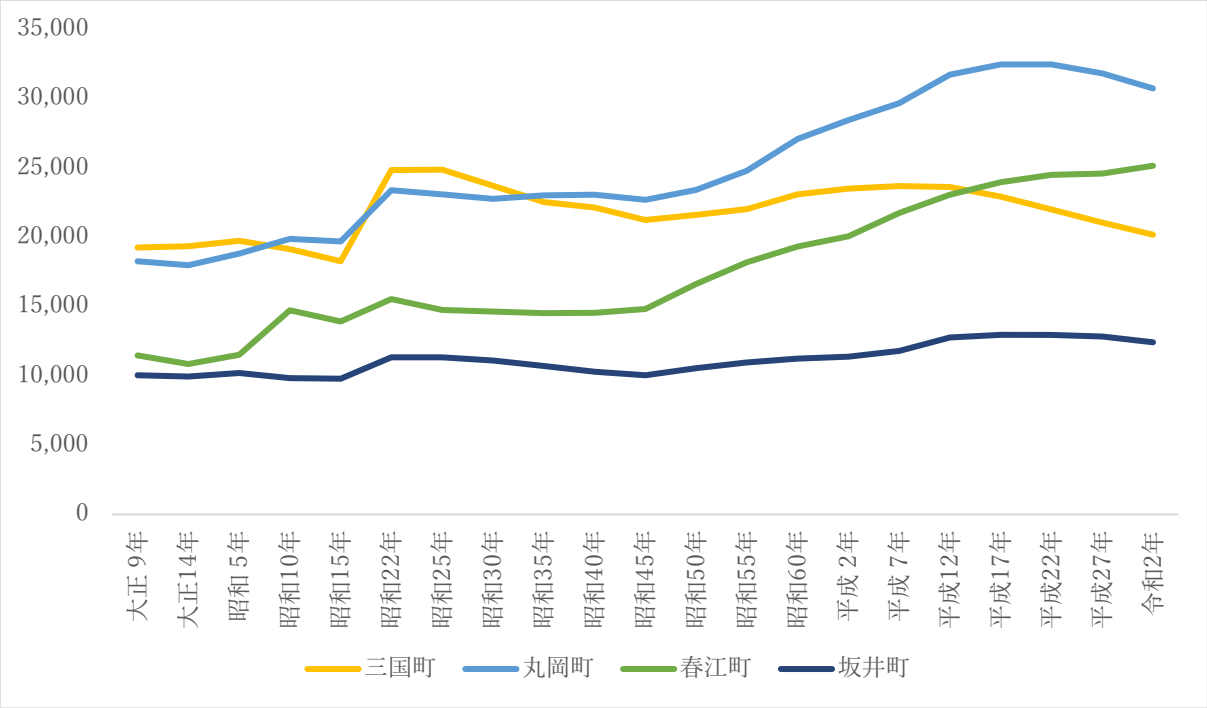
令和 2 年（2020）10 月 1 日現在の人口は 88,481 人で、福井県全体 766,863 人の 11.5%を占め、福井市に次ぐ福井県第 2 位の人口規模となっている。合併直前にあたる平成 17 年（2005）の人口が最も多く 92,318 人であり、それ以降は減少傾向にある。

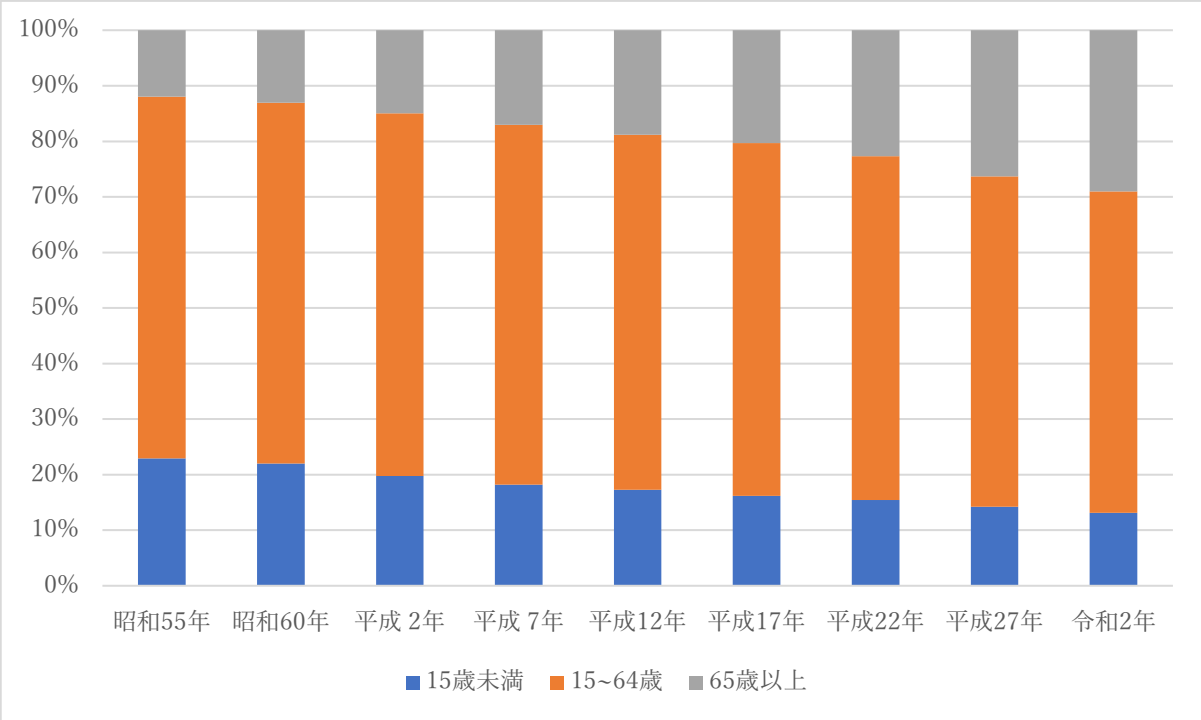
令和 2 年（2020）における年少人口（15 歳未満）は 11,535 人（13.2%）で、福井県平均の 12.6%を上回っているが、減少傾向にある。老年人口（65 歳以上）は 25,434 人（29%）で、福井県平均の 30.8%を下回っているが、一貫した増加傾向にあり、平成 12 年（2000）以降は年少人口が老年人口より少なくなっている。

今後の本市の人口は、国立社会保障・人口問題研究所が平成 30 年（2018）に公表した将来推計人口によると、令和 42 年（2060）には 59,811 人にまで減少することが予測されている。人口減少に伴い、平成 18 年（2006）では限界集落が 1 区、準限界集落が 37 区であったが、令和元年（2019）では限界集落が 21 区、準限界集落が 114 区となっている（坂井市人口ビジョン）。準限界集落は市全体に散在しており、全体的に高齢化が進んでいる状況である。

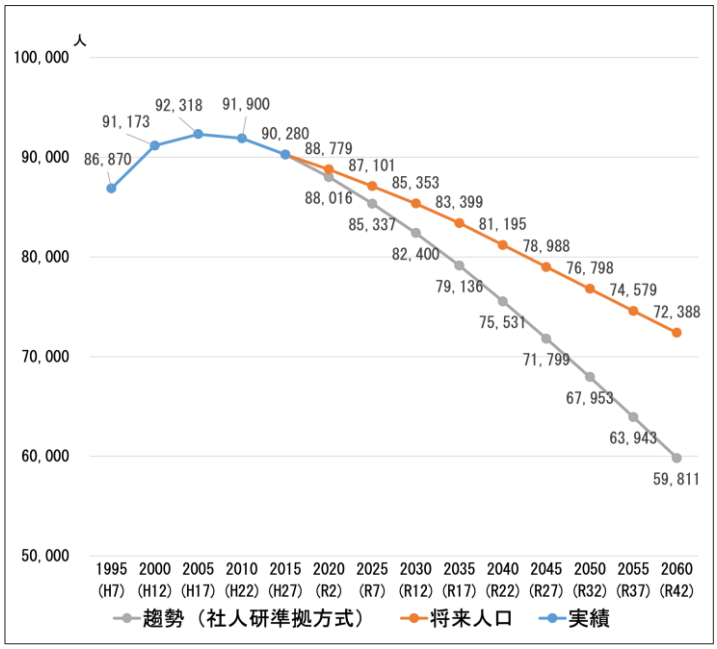


坂井市の男女別人口推移（総務省統計局「国勢調査」をもとに作成）





坂井市の地域別/年齢別人口推移（総務省統計局「国勢調査」をもとに作成）



将来の人口や年齢構成の予測値（国立社会保障・人口問題研究所）

（４）交通機関

近世には舟運が輸送の中心であり、福井城下町や嶺北七郡を背に持つ三国の廻船は繁栄を極めたが、明治に入り帆船から汽船へ転換したことや明治 30 年（1897）に北陸線福井駅－小松駅間が開業したことで交通の中心が海運から陸運へと移った。

明治時代以降、主な移動の交通手段は、鉄道からバスや車に変わった。国道 8 号、三国・金津・丸岡・鳴鹿の各地域をつなぐ丸岡道や、丸岡町田町から坂井町新庄・大関を通ってあわら市に至る十郷道などが整備された。

戦後、自動車交通の発達により、鉄道利用者が激減し、京福電気鉄道丸岡線と永平寺線が廃線となった。1970 年代には国道 8 号バイパスおよび北陸自動車道が開通した。市内には丸岡インターチェンジが設置されている。

現在、市内の移動手段としては自動車が重要で、東部には北陸自動車道や国道 364 号、西部には国道 305 号、中央部に国道 8 号、嶺北縦貫道、芦原街道が通っている。国道 305 号は越前海岸一帯と石川県加賀市方面とを結び、山間部を走る国道 364 号は永平寺町や石川県加賀市山中町方面とを結ぶ重要な幹線道路となっている。

市内の鉄道には、福井市と三国港をつなぐえちぜん鉄道と、JR 北陸本線を引き継いで株式会社ハピラインふくいが運営する並行在来線がある。令和 5 年度（2023）

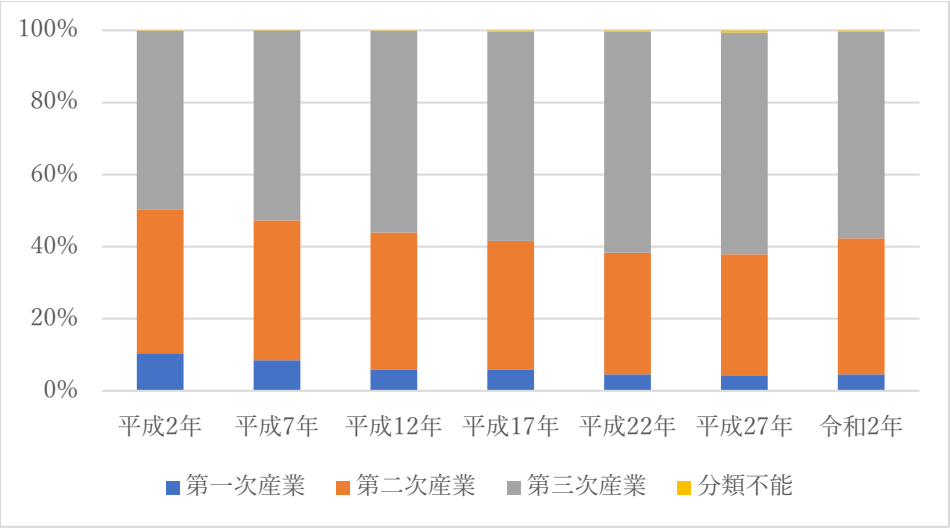
末に北陸新幹線の県内延伸に伴い、隣接市のあわら市に北陸新幹線芦原温泉駅が開業した。芦原温泉駅から市内各地へは、自動車を利用すれば約 20 分で移動できるため、観光客の来訪が期待されている。また、市内には丸岡駅と春江駅の２駅があり、金沢などの北陸方面と米原などの関西方面とつながっている。関西方面への移動では、新幹線開業に伴って金沢・敦賀間の特急列車が廃止されたことにより、敦賀での乗り換えが必要となった。

鉄道以外の公共交通機関としては、京福バスの他、令和５年（2023）１月 13 日からは、近距離移動を支える新たな交通として、坂井市オンデマンド型交通(乗合タクシー)「イータク」が市内全域で運行を開始している。

令和２年（2020）には、丸岡町の交通結節点および丸岡城への玄関口として、バスターミナル機能とにぎわい交流機能を併設した施設「丸岡バスターミナル交流センター」を整備した。

（５）産業

令和 2 年度（2020）の国勢調査によれば、本市の就業人口は 46,022 人で、総人口の 52.0%となっている。産業別就業人口は第 1 次産業が 1,739 人（2%）、第 2 次産業が 15,592 人（17.6%）、第 3 次産業が 28,591 人（32.3%）で第 3 次産業の割合が多いことが分かる。第 1 次及び第 2 次産業の就業人口は平成 17 年（2005）から平成 22 年（2010）にかけて減少し、第３次産業は微増傾向となっている。令和２年（2020）には、第一次産業、第二次産業、第三次産業のいずれも就業人口が減少しており、その減少幅は第三次産業が最も高い。第 1 次産業では、農業、水産漁業、林業と幅広く展開されている。



坂井市の 1 次～3 次産業の産業別就業人口比の推移

①農林水産業

平成 27 年（2015）の農業従事者数は 5,780 人、農家数が 2,042 戸（平成 27 年農林業センサス）であり、経年的には、農家人口、農家数ともに減少傾向にある。

三里浜のらっきょう畑（10 月下旬～11 月上旬に花が咲く）

九頭竜川下流域に広がる坂井平野は福井県屈指の農業地帯となっており、水田地域では稲作を中心として大麦・大豆・そばを組み合わせた農業が盛んである。また、坂井北部丘陵地ではメロン、スイカ、ナシなどの果物類、三里浜砂丘地ではらっきょうや人参などの野菜を中心とした農業が展開されている。これらの農産物の直売所としては、平成 10 年（1998）に道の駅みくにの「ふれあいパーク三里浜」や平成 12（2000）年に「道の駅さかい坂井地域交流センターいねす」、また平成 29 年（2017）には、ゆりの里公園内に「ゆりいち」が整備され、地元の季節を感じる新鮮な野菜や果物、特産品が販売されている。

漁業は、本市沖の海底の形状が沿岸から沖合にかけて起伏に富み、玄達瀬や松出シ瀬などの大きな天然礁を有していることから好漁場となっている。

しかし近年では、気候変動などによる水揚げの減少から漁業者が減少している。平成 20 年（2008）と平成 30 年（2018）に実施された漁業センサスの調査結果を比べると、平成 20 年（2008）では海面漁業の経営体数が福井県内の市町で最も多い 175 経営体であったが、この 10 年で 68 経営体に減少している。

林業は、市の面積の約 3 割を山林が占めており、豊富な森林資源を有している。そのうちの約 5 割が木材生産のために植林された人工林である。林業従事者数は、植林から間伐への作業内容の変化や高齢化により減少傾向にある。

②商業

平成 26 年（2014）の商業従業者数は 5,031 人、事業所数は 736 か所、年間販売額は約 1,161 億円（平成 26 年商業統計調査）である。経年的にみると、事業所数は減少し、従業者数は増減を繰り返している。

郊外型の大型店舗やコンビニエンスストアをはじめ、幹線道路沿いへのフランチャイズ系の飲食店や食品、医薬品など取り扱う小売店舗の出店が増加しているとともに、福井市北部地区に本市をマーケットエリアと見込む大規模な商業施設の集積などが進んでいる。地域の商店を取り巻く環境が非常に厳しい中、店舗経営者の高

齢化や後継者不足に伴い、店舗が減少し、空き店舗も増加している。

③工業

令和 2（2020）年の事業者数（従業員 4 人以上の事業所）は 310 事業所、製造品出荷額は約 3,038 億円（令和 2 年工業統計調査）である。近年では、事業者数は減少し、従業者数は増減を繰り返している。また、市内にある最も多い事業所は、繊維産業関係で 103 事業所ある。丸岡町で生産される細幅織物とゆかた帯は日本一の生産量を誇っている。織りの技術を活用し、図柄処理をコンピューターで行い、織物として描画する「越前織」も土産物やカレンダーなどとして生産されている。

（６）観光

本市は、天然記念物・名勝の「東尋坊」や現存 12 天守に数えられる「丸岡城」をはじめ、北前船寄港地として日本遺産に認定された「三国湊」など数多くの恵まれた文化財を観光資源とした県内トップの観光客入込数を誇っている。

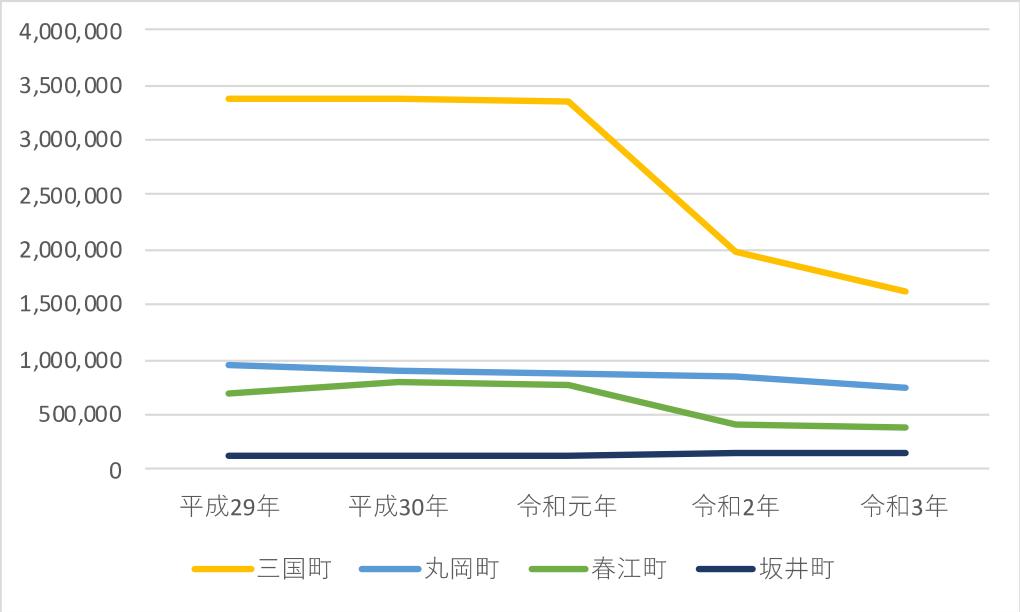
一方で、より経済波及効果の高い滞在型観光地としての転換は十分とは言い難いため、令和 2 年（2020）に坂井市観光連盟、坂井市三国観光協会、坂井市丸岡観光協会の業務の一部を統合し、一般社団法人 DMO さかい観光局が設立されている。現在、それらを中心に、観光地としての魅力の発信や、自然、歴史、文化財などのゆたかな資源を活かした体験型観光、歴史的な町並み散策、まちなか観光を充実させるなど観光資源の魅力向上に努めている。

東尋坊では、平成 23 年（2011）に商店街の空き家を活用した「東尋坊観光交流センター」の整備をしている。民間の施設としては、昭和 34 年（1959）に越前松島国定公園内に松島水族館、令和 2 年（2020）に空き家を活用した全国のお城ファンが集うカフェ「城小屋マルコ」が丸岡城のふもとに整備されている。

また、さらなる誘客のために本市単体だけでなく、隣接市町と連携してテーマやストーリー性を持たせ、それらの魅力を発信する広域観光が推進されている。

令和 2 年（2020）頃から流行した新型コロナウイルス感染症の観光への影響は大きく、主要な観光地でもある東尋坊や丸岡城の来場者数も流行前の約 70％まで落ち込んだ。地域別に比較すると観光客入込数の減少幅が最も大きいのは三国町で、令和元年（2019）以前は 3,000,000 人以上の入込数があったが、令和 3 年（2021）には以前の半分程に減少している。北陸新幹線県内延伸により、首都圏からの来訪者の

増加が期待される。



坂井市の地域別観光客入込数の推移（令和４年（2022）坂井市統計年報）

３．歴史的環境

（１）歴史

①中世以前

〇旧石器時代

この時代の人々は、土器を使用せず、石を打ち割って作る石器、動物の骨や角を利用した骨角器（こっかくき）を用いて、氷河期の寒冷な気候の中、動物類を追い求めながら遊動生活を送っていた。福井県内では、三国町内で個人が石器 3 点を発見し、昭和 56（1981）年に後期旧石器時代のものと認定された。これにより、県内でも約 4 万年前から 1 万数千年前の後期旧石器時代に人々が生活していたことが確認された。石器が発見された場所は現在、雄島（おしま）遺跡（三国町安島）・馬コロバシ遺跡（三国町陣ケ岡）・西下向（にししもむかい）遺跡（三国町米ケ脇）と名付けられている。この遺跡のうち、西下向遺跡は昭和 57 年（1982）・58 年（1983）に発掘調査が実施された。出土した石器は瀬戸内・近畿地方を中心に分布する国府型ナイフ形石器に属するものであるが、主流の剥片（はくへん）製作技法である「瀬戸内（せとうち）技法」とは異なり、地方的特色をもつ技法でつくられたものである。この技法は新たに「三国（みくに）技法」と命名された。この石器が発見された西下向遺跡は、全国でも著名な遺跡として知られている。

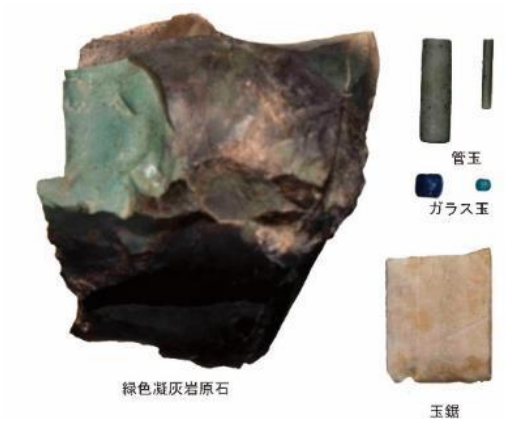
○縄文時代

縄や撚紐を表面に転がしたり、粘土を華麗に貼り付けた土器を「縄文土器」と呼び、それらの土器の製作・使用した時代は「縄文時代」と呼ばれている。縄文時代は、1 万数千年もの長期間にわたり、土器によって草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の 6 期に区分される。この時代は、大きな気温変動で、「縄文海進」・「縄文海退」と言われる海水面の移動があった結果、居住できる場所が時期により変動したりしていたのではないかと推測されている。本市のあたりは、平野部のほとんどが海で、湾のようになっていたとされる。

本市では草創期から前期の遺跡が少ないが、北陸自動車道や北陸新幹線県内延伸、圃場整備といった開発に伴う発掘調査により、東向野遺跡（丸岡町小黒）などでは中期から晩期の多くの遺構や遺物が確認されている。これまでは、縄文時代の集落は、山地に近い台地上や河岸段丘上に形成されたと考えられていたが、沖布目北遺跡（春江町沖布目）では平野部に集落跡が確認された。他にも沖積地の坂井平野内に位置する舟寄遺跡（丸岡町舟寄）では、縄文時代中期の土器や石器が出土したほか、10 基以上の建物跡が発見された。縄文時代中期以降、人々の生活の場は坂井平野の微高地などに移っていったとみられる。

○弥生時代

日本列島で本格的に水稲耕作が始まった時代が「弥生時代」と言われる。弥生時代は稲作と共に、各種の技術なども各地域の交流に伴って伝播した。近畿地方を中心に確認されている農耕祭祀に使用された銅鐸が、春江町井向や三国町米ケ脇など、市内でも複数の場所で発見されている。日本全体で見ると、本市は銅鐸の発見場所としては日本海側で北限にあたる。また、加戸下屋敷遺跡（三国町加戸）、河和田遺跡（坂井町河和田）では玉作にともなう遺物が出土しており、北陸地方各地に共通するように、管玉や勾玉などの玉類の生産が本市においても盛んであったことがわかる。

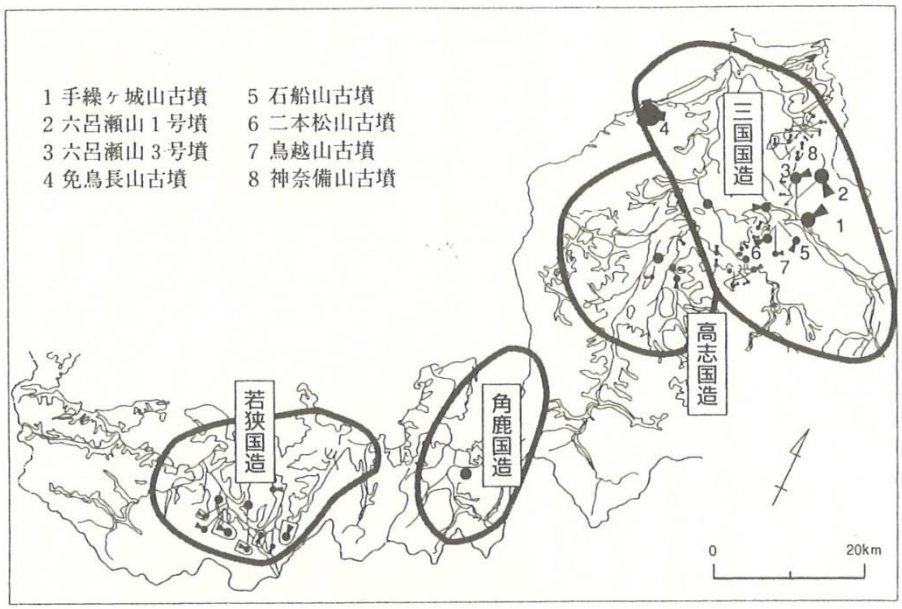


玉造関連遺物（河和田遺跡）

袈裟襷紋銅鐸（三国町米ケ脇）

〇古墳時代

古墳時代は、前方後円墳などの古墳が造営され、中央（大和政権）と各地の政治勢力のつながりが形成されていく時代である。本市は、継体（けいたい）天皇の母・振媛（ふりひめ）ゆかりの地で天皇が育った「坂中井（さかない）の高向」があったと推定されている。それを裏付けるかのように、市内には継体天皇の伝承が多く残り、中央とのつながりが特別強い地域であったと言える。市内には、葺石（ふきいし）・埴輪（はにわ）を有し、笏谷石製の石棺を納めたと推定される前方後円墳（1 号墳・3 号墳）を核とする六呂瀬山（ろくろせやま）古墳群（丸岡町上久米田・下久米田）があり、1 号墳は北陸最大の全長 143mを誇る。山の尾根を利用して作られており、前方後円墳でありながら整った形はしていない。また、本市北東部からあわら市にまたがる山地には、総数約 310 基からなる横山古墳群がある。この古墳群の南端に位置する前方後円墳の椀貸山（わんかしやま）古墳（丸岡町坪江）は、継体天皇ゆかりの椀子（まるこ）王子の墓とも伝えられる。この椀貸山古墳と間近の神奈備山（かんなびやま）古墳は石屋形を備えた横穴式石室の特徴は、九州地方との交流があったことを示している。これらの古墳群のほか、永平寺（えいへいじ）町の松岡（まつおか）古墳群なども合わせると、本市や本市周辺の山地には現在の福井県嶺北地方にある前方後円墳の約 4 分の 1 が集中している。平野部を見下ろせる位置にあり、麓に住む人々に大きな力を誇示する大豪族がいたことがわかる。一方、西部丘陵には三国町にも出世山古墳群（三国町宿）をはじめ、水運を意識した 5～6 世紀の古墳が丘陵上に展開している。



越前若狭の国造と前方後円墳の分布（『新修 坂井町誌』）

三国国造の統治範囲は越前国の約半分であったと推測されている。坂井郡にある古墳群は、三国国造と関係が深いことが推測される

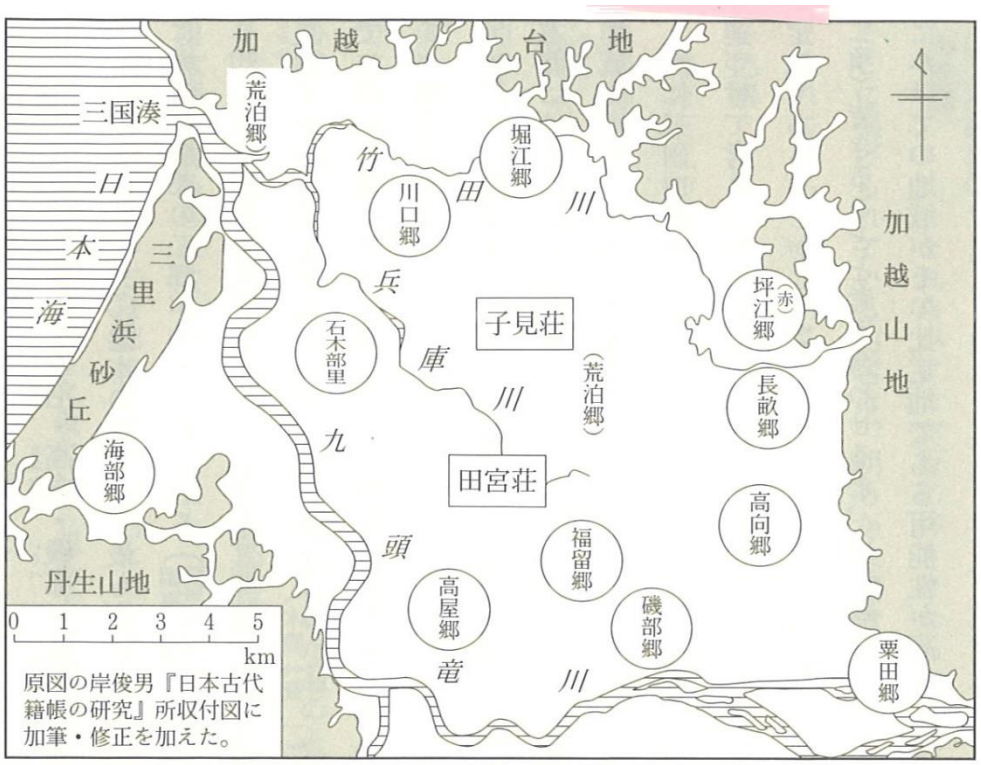
坂井市龍翔博物館作成

三国の名が史上に初めてみえるのは、『日本書紀』の継体天皇即位前紀で、天皇の父、彦主人王が近江国高嶋郡の三尾（滋賀県高島市安曇川町付近）の別行（別邸）より使を遣して、天皇の母、振媛を三国の坂中井からむかえて妃としたという記事である。天皇が幼年の時、父王が亡くなったので、母の振媛は父母の安否を問うついでの郷里の高向に帰ったという。『日本書記』は高向を越前の邑であると注記している。さらに武烈天皇亡き後、継嗣が絶えようとしていたので、大伴金村等は男迹大王を三国より迎えたと伝えられている。なお天皇と三尾君堅槭の女・倭媛との間に生まれた椀子王子を三国公の祖としている。ちなみに三国は坂中井（のちの坂井郡）を中心とした広い地域の名称である。

『越の振媛と継体天皇』
（丸岡町教育委員会）

〇奈良・平安時代

奈良時代には、天皇中心の律令制度に基づく中央集権の国家体制が整備されていき、地方は国・郡・里（のちに郷）を単位として区分された。もともと北陸地方は、越と呼ばれていたが、持統天皇の時代までには、越は越前・越中・越後に分国して越前国が誕生したと考えられている。その中にあって、市域は坂井郡に属し、『和名類聚抄』高山寺本（平安時代末期）では、坂井郡は粟田・荒泊・高向・磯部・長畝・高屋・坪江・福留・海部・川口の 10 郷があったと書かれている。これらの郷の推定地は、木簡や文書によってほぼ特定されている。律令制が整備されたことにより、交通路も整えられ、市域のほぼ中央に官道の北陸道が通り、各所に駅も設置されていったとみられる。



坂井郡郷（里）の分布（『新修 坂井町誌』）

荘園の形成

天平 15 年（743）に墾田永年私財法が発布されて以降、市域には寺社が所有する荘園（しょうえん）が形成された。この荘園での収穫は九頭竜川の水運を利用して三国湊へ運ばれ、琵琶湖・宇治川・木津川を経由して奈良の都へと運送された。しかし、荘園専属の田地耕作者となる農民がおらず、安定した労働力の確保が難しく、荘園経営は大きく崩れ、10 世紀頃までには一時衰退していったとされる。

市域において本格的に荘園が成立・確立するのは、平安末期に、現在の坂井市からあわら市にかけて成立した越前国河口荘が、白河法皇により奈良の興福寺に寄進されてからである。興福寺領の荘園が市域に進出し始めると、いずれも藤原氏の氏寺・氏神である興福寺と春日大社との関係が強まり、神仏習合思想とした本地垂迹（ほんちすいじゃく）説も流行していたことから、春日信仰も市域に広がっていった。このほか、市域には、岐阜県・石川県・福井県の 3 県にまたがる霊峰白山を神の山とする白山信仰も既にあった。

この頃には、坂井郡は九頭竜川を挟んで、坂北郡、坂南郡の二郡に分かれていった。

坂井市龍翔博物館作成

兵庫地区では、平安時代に春日大社を鎮主する奈良興福寺の荘園であったという史実が縁となり、小学校学校田「育つん田」で収穫されたお米を、毎年、奈良興福寺に献上している。また、平成 29 年（2017）えちぜん鉄道の駅名変更では、地区の興福寺とのゆかりと幸福度１位の福井県をかけあわせて、駅名を下兵庫こうふく駅とした。

東大寺による大規模荘園開発こうふく

東大寺は越前をはじめ北陸地方で大規模な荘園開発を行った。当時の越前は有望な未開発の原野に恵まれており、九頭竜川系諸河川および日本海の水運などを利用すれば、荘園の産物を奈良の都に運送できるという利点を持っていた。東大寺は越前荘園の経営にあたって足羽郡や坂井郡で水運を利用し得る地点に荘園を設け、三国湊を利用し、春米等を積出した。

東大寺領荘園と品遅部君広耳寄進墾田の分布：東大寺越前国鯖田国富荘は、坂井郡大領の品遅部広耳の寄進によって成立する。広耳が寄進した 100 町の田は、当初は坂井郡に散在していたが、やがて、荘園をできるだけ 1 つの領域にまとめる(一円化)ように東大寺が動き出し、九頭竜川近くの領域にまとめられた。東大寺越前国桑原荘の正確な位置は不明。(『図説福井県史』より)

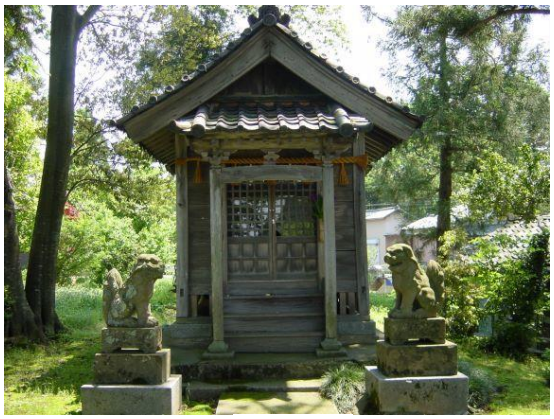
斉藤氏と春日大社

坂井市には、斎藤実盛に関連する市指定文化財（遺跡）が２か所所在している。

斎藤実盛は、天永２年（1111)、越前国丹生郡南井で河合斎藤氏の河合則盛の子として生まれた。後に実盛は、武蔵国の長井に在住していた斎藤氏の一族に養子となった。斎藤氏は、越前に勢力を持った大野の平泉寺とも結びついていて、長史（指導者）を出している。平氏が今庄の源義仲方の燧ケ城を囲んだとき、城内にいて平氏に寝返り、落城させた平泉寺の長史斉明は斎藤氏の長史だったといわれている。

実盛池は、丸岡城の北東にあり。源平合戦に名高い斎藤実盛にゆかりの池である。伝説によれば、実盛誕生の際にこの池の水を産湯に使ったという。上長畝には、実盛の館といわれる長畝館跡と実盛堂があり、堂内には仏師新井九兵衛作による実盛の武人像が祀られている。長畝集落にある斎藤実盛を祀った堂。堂内には僧衣の実盛と甲冑姿の実盛の木像(江戸時代末期)、十一面観音が安置されている。

実盛池



実盛堂

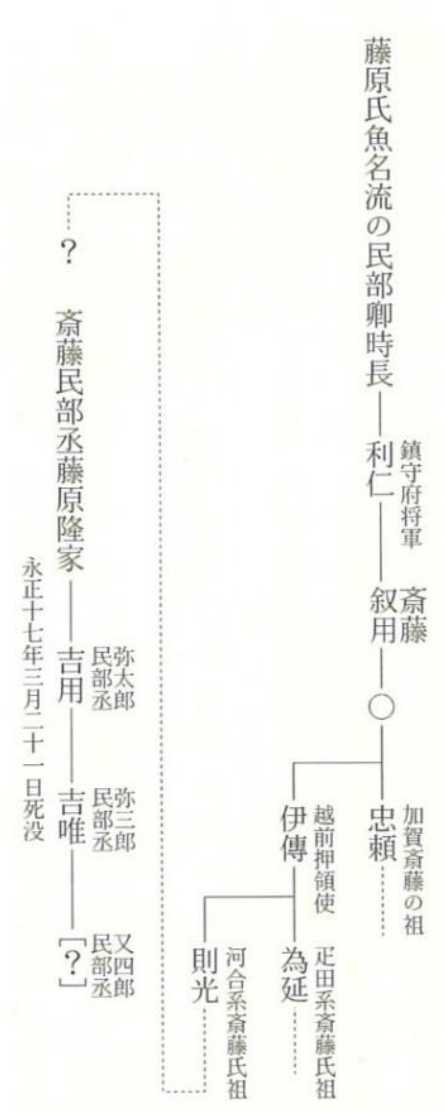
十郷用水は、寛弘８年（1011)、越前国の押領使（おうりょうし）の斎藤民部少輔伊傳が開発したという伝承があり、齋藤氏の祖先である藤原氏の神社である春日神社を十郷に創建した。その惣社はあわら市本荘の春日神社であり、もともとは継体天皇に由来する井口神社であったとされている。本庄の春日神社の神官と井守（用水の管理責任者）を大連家が担当して江戸時代は大庄屋として用水管理の任にあたった。

藤原北家利仁流斉藤氏の一族は越前、加賀で勢力を伸ばし、平安時代後期から鎌倉時代にかけて越前押領使、加賀介などの要職を歴任し、全国各地の地頭となった。戦国時代の加賀守護の富樫氏、美濃の守護代・守護の斉藤氏も一族である。江戸時代の大洲藩主、水口藩主の加藤氏（加賀斎藤から加藤氏となる）も一族である。

勧進帳で知られる富樫氏の分家が坂井市丸岡町坪ノ内に本拠があった坪内氏である。坪内氏は越前守護斯波氏の家臣として尾張に赴き、木曽川流域の国人領主となった（尾張国松倉城主、現在は岐阜県各務原市に属する）。坪内氏は木曽川流域の国人・土豪（蜂須賀、生駒、土田、前野、大沢氏など）を坪内党として束ねていた。

徳川家康に仕えた坪内氏は江戸初期から幕末まで 6,500 石の大身旗本（寄合）として続いた。近年、坪内氏陣屋跡地は公園として整備された（岐阜県各務原市）。坂井市の現在の行政区域内の地名に由来する江戸時代の大名、大身旗本（寄合という地位、3 千石以上の旗本、領地に陣屋を置く）クラスの有力武士は坪内氏のみである。

『十郷横落堤用水江筋幷井組村々絵図』（大連三郎左衛門家文書、あわら市指定文化財）：十郷用水のうち横落堤以北を描いており、　主要な５本の江筋がみえる。丸岡城東方の水路は新江用水である。



斉藤氏系図（『新修　坂井町誌』）：藤原利仁は鎮守府将軍。その子孫が斉藤氏となり、有力な武士団として繁栄した。藤原利仁は、『今昔物語集』の中にある、五位の者に芋粥を食べさせようと京都から敦賀の舘へ連れ帰った話が有名である。

② 中世

○鎌倉時代

源頼朝によって幕府が開かれた鎌倉時代には、地方支配のために守護・地頭が任命され、地方に置かれた。坂北郡内の河口荘の地頭には、竹田川中流域を主に本拠としていた疋田系斎藤氏の武士が命じられたとされる。河口荘は、新庄郷・関郷・大口郷・王見郷・兵庫郷・荒居郷・新郷・本庄郷・溝江郷・細呂宜郷の 10 郷に分かれ、隣接の坪江荘とともに、領主の興福寺にとって重要な経済基盤であった。

広大な荘園を維持するには、水の供給が必要である。奈良時代以降に開削された用水を整備・統合し、大規模な農業用水が形成された。なかでも、九頭竜川を水源に鳴鹿地域で取水し、坂井平野一帯を灌漑する用水は、河口荘十郷にちなみ、十郷用水と呼ばれた。一方、坂井平野に広がる荘園の年貢物の積出港の三国湊は川の舟運を利用して発展した。鎌倉時代後期には、時宗の開祖・一遍の弟子である真教が越前を訪れ、現在の丸岡町長崎に称念寺を創建した。

宗教の面では、関東地方にルーツをもつ真宗高田門流の集団が越前に最初に入り、続いて浄土真宗本願寺門流の集団も越前に進出した。

また、榎富荘（春江町江留上・江留中・江留下）は女院領となった。女院領は課税が免除されていたことで、管理を任されていた下人がのちに裕福になり、都で金融業の借上を行うなど、下人らも次第に力を持つようになっていった。

○南北朝・室町時代

元弘 3 年（1333）に鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇を中心に行われた政治が短期間で崩壊した。その結果政権が不安定になり、次の政権争いのために朝廷が北朝方と南朝方に分かれて抗争したのが、南北朝時代である。南朝方の拠点を作ろうと、後醍醐天皇は、新田義貞を皇子とともに越前に入国させた。以降、越前国内で合戦が繰り返され、最後には北朝方が勝利した。

越前の各地で戦った義貞は、藤島の灯明寺畷（現在の福井市新田塚町あたり）で越前守護の斯波氏の軍に敗れ、命を落としている。義貞の亡骸は時宗の僧によって葬られ、称念寺（丸岡町長崎）の境内には新田義貞の墓所がある。

足利尊氏により、室町幕府が開かれ、室町時代が始まる。南北朝時代から室町時代を通して、越前は守護となった斯波氏が支配した。

文明 3 年（1471）には、浄土真宗本願寺の八世・蓮如が吉崎（あわら市）に滞在し、御文（御文章）を用いた積極的な教化を行ったことで、本願寺門流は北陸地域

で飛躍的に勢力を拡大させていった。また、三国湊は、当時の海洋例規『廻船式目』の中で、主要な湊町三津七湊のひとつとして記載される、全国的な物資の輸送交易港として繁栄した。

三国湊と三津七湊

中世の三国湊は日本海沿岸有数の要港として、また河口、坪江両荘の年貢・産物の積出国として、さらに越前国および北陸一番の関所の地位にあった。
三国湊では、千手寺、性海寺に大密教寺院付近の諸町が港町形成の最も古い歴史を持っている。とりわけ千手寺の門前町が中世に起源をもつ町と推定される。

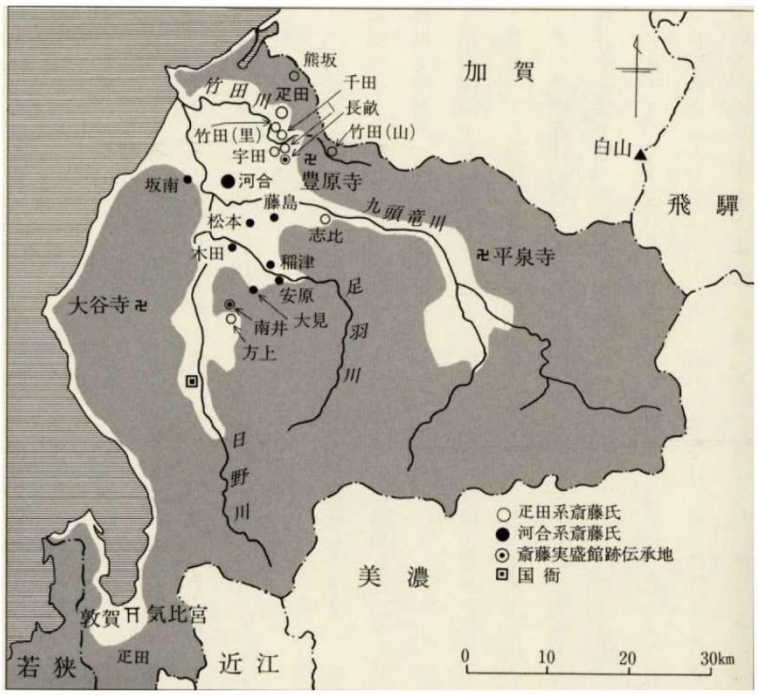
戦国時代、日本では海運に関連する法律『廻船式目』が成立した。『廻船式目』の中には、日本の室町時代における重要な湊が 10 箇所あり、それが三津七湊である。三津とは、伊勢の津、筑前の博多、泉の堺である。七湊とは、越前の三国、加賀の本吉、能登の輪島、越中の岩瀬、越後の直江津、出羽の秋田、奥州の十三湊である。三国湊は全国で４番目に記載されている。

河口・坪江庄要図（『芦原町史』より）

越前における武士団の形成、国人領主として三国湊を統治した堀江氏

堀江氏は藤原利仁の子孫と伝わり、鎌倉時代以来、坂井郡一帯を支配し、文明(1470年頃)以来朝倉氏に臣従した。堀江景經は、長禄年中(1460年頃)、番田に館を造ったといわれている。朝倉敏景に従い2,500貫の領地を有し、その勢力を誇った。一時、兵庫郷井向村(坂井市春江町)にも居を移している。

守護朝倉氏の下で最有力の外様であり、一乗谷では城下町の外に屋敷があった。朝倉氏と対立し能登に隠居した。信長に協力し大聖寺に領地、瀧谷寺に幽閉、自害滅亡した。



越前斉藤氏の勢力図

石龕開山堂

室町石仏または朝倉石仏（笏谷石）といわれる。内側石棺に十三仏が浮き彫りにされている。堀江氏（元奈良大乗院荘園預かり本荘の庄の地主）が築造したもので、堀江氏は後に織田信長と相通じた。

中世以降、当地方を支配した豪族堀江氏をはじめ、朝倉氏、柴田氏、さらに福井藩主松平氏、丸岡藩主本多・有馬両氏ら領主の祈願所であり、その保護を受けた。

朝倉氏一族の向氏

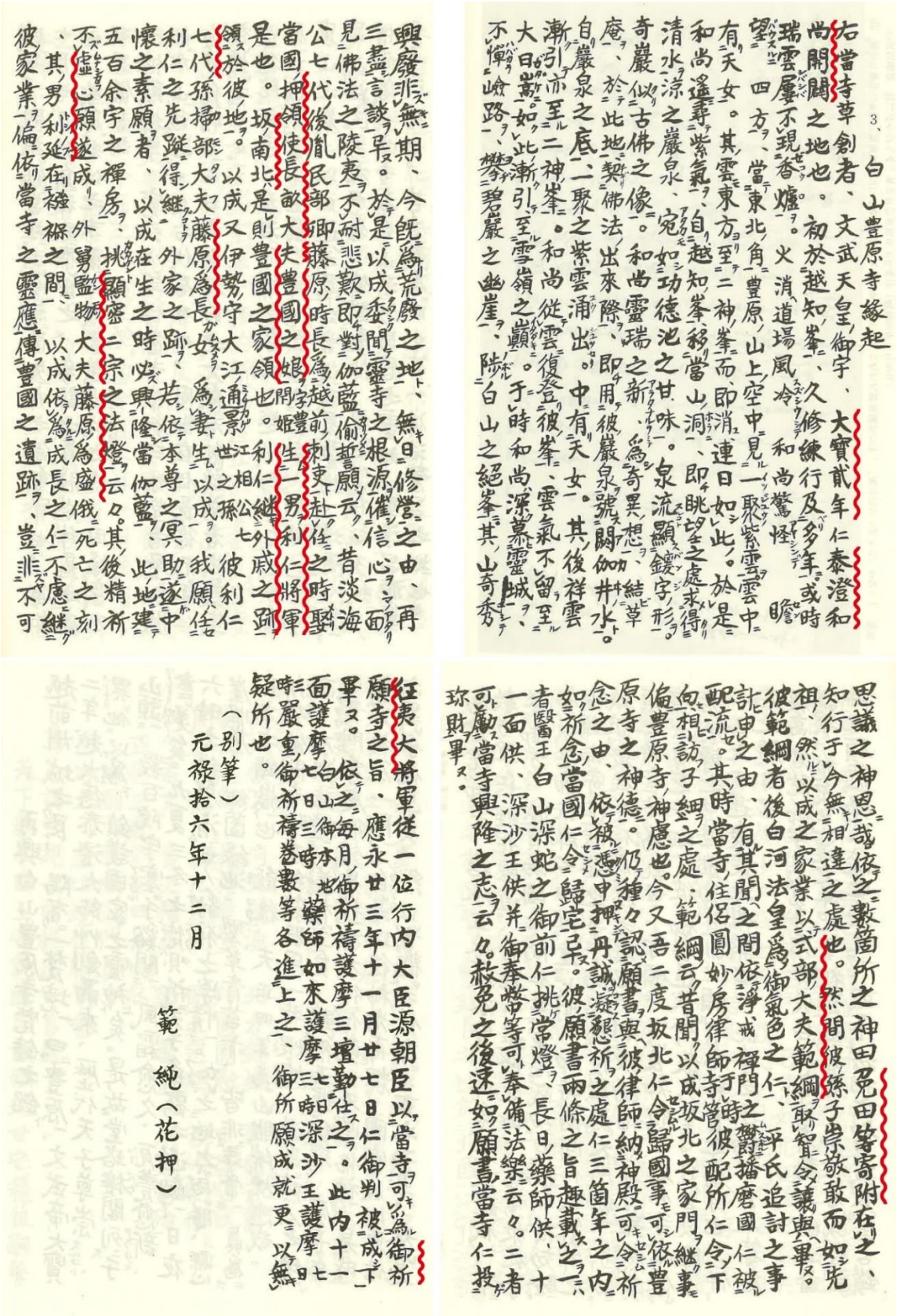
『一乗録』（江戸時代中期に成立とされている）によれば越前向氏は朝倉氏庶流の一門で、南北朝時代に朝倉氏2代目朝倉高景の三男である久景が向姓を名乗ったことが始まりであるとされる。越前国の坂井郡に拠点を置いていた一族で、紀倍神社の社記曰く1万石を領する大身であったという。

天正3年（1575年）に信長が越前一向一揆の鎮圧に本腰を入れて乗り出し、越前に進軍したときには、8月12日に敦賀に滞陣していた信長の前に現れ、再び降伏を願い出た。信長は久家を助命し、同年8月16日には信長の命で朝倉景健自害の検死役を務めた。その後の動向は不明である。

木部神社は、越前朝倉氏の一族である向氏の屋敷「木部新保館」があったとされる。越前朝倉氏二代高景の５子、向駿河守久景の子、光繁が永正元年（1504）鬼辺郷を領してその子久家と共に当村に居館したという。向氏館跡と思われる地は明治初年の地籍図で 72 字「舘屋敷」73 字「岡田屋敷」が館跡で環濠と土居が描かれている。

『明智軍記』（山城屋佐兵衛版 、元禄 15 年）と三国湊

明智軍記　巻一、には、朝倉家臣時代の明智光秀が三国湊を訪問したときの様子が詳しく描かれている。称念寺との関係が深いことがわかる。



3、白山豊原寺縁起

右當寺草創者、文武天皇御宇、大寶貳年仁泰澄和尚開闢之地也。初於越知峯、久修練行及多年、或時瑞雲屢不現香爐。火消、道場風冷、和尚驚怪瞻望、四方、當東北角豊原山上空中見一聚紫雲、雲中有天女。其雲東方至二神峯而即消、連日如此。於是和尚遥尋紫氣、自越知峯移當山洞、即眺望之處求得清水、涼之巖泉、宛如功德池之甘味。泉流顯鑑字形、奇巖似古佛之像。和尚靈瑞之新、為奇異、想結草庵、於此地刻佛法出來際、即用彼巖泉號閼伽井水。自巖泉之底、一聚之紫雲涌出。中有天女。其後祥雲漸引亦至二神峯。和尚從雲復登彼峯、雲氣不留、至大日嶽。如此漸引至雪嶺之巔。于時和尚深慕靈域、不憚嶮路、攀碧巖之幽崖、陟白山之絶峯、其山奇秀興廢非無期、今既為荒廢之地、無日修營之由、再三盡言談呈。於是以成委聞、靈寺之根源、催信心、面見佛法之陵夷、不耐悲歎、即對伽藍、偷盃願云、昔淡海公七代後胤民部卿藤原時長為越前刺史赴任之時、娶當國押領使長畝大夫豊國之娘、聞姫豊生一男、利仁將軍是也。坂南北、是則豊國之家領也。利仁継外戚之跡、領於彼地。以成又伊勢守大江通景江相公世之孫、彼利仁七代孫掃部大夫藤原為長女、為妻生、以成。我願任利仁之先蹤、得継外家之跡、若依本尊之冥助、遂中懐之素願者、以成在生之時、必興隆當伽藍、此地建五百余宇之禪房、挑願密二宗之法燈云々。其後精祈不虚、心願遂成、外舅監物大夫藤原為盛、俄死亡之刻、其男利延在襁褓之間、以成依為成長之仁、不慮継彼家業、偏依當寺之靈應、傳豊國之遺跡、豈非不可思議之神思哉。依之、數箇所之神田免田等寄附在之、知行于今無相違之處也。然間、彼孫子崇敬敢而如先祖、然以成之家業、以式部大夫範綱、取智令議、與畢。彼範綱者、後白河法皇為御氣色之仁、平氏追討之事、計申之由、有其聞、之間、依浄戒禪門之勸、播磨國仁被配流。其時當寺、住侶圓妙房律師寺、彼配所仁令下向、相訪子細之處、範綱云、昔聞以成坂北之家門継事、偏豊原寺神慮也。今又吾二度坂北仁令歸國事、可依豊原寺之神德。仍種々認願書、與彼律師、納神殿、可令祈念之由、依被憑申、丹誠凝懇祈之處、仁三箇年之内、如祈念、當國仁令歸宅早。彼願書、兩條之旨趣、載之、一者醫王白山深蛇之御前仁、挑常燈、長日藥師供、十一面供、深沙王供、并御奉幣等、可奉備法樂云々。二者可勵當寺興隆之志云々。赦免之後、速如願書、當寺仁、投珎財畢。

狂夷大將軍従一位行内大臣源朝臣、以當寺可為御祈願寺之旨、應永廿三年十一月廿七日仁御判被成下畢。依之、毎月御祈禱護摩三壇勤仕之。此内十一面護摩七日、白山御本地藥師如來護摩七日三時、深沙王護摩七日三時、嚴重御祈禱、巻數等、各進上之、御所願成就更以無疑所也。

（別筆）

元禄拾六年十二月　　範　純（花押）

『豊原寺　演仙寺　本専寺　興宗寺　坪川家　史全』：白山豊原寺の縁起には、藤原利仁の父親は越前押領使である秦豊国の娘と結婚し、領地を坂井北部、南部の秦豊国の領地を継承したと記載されている。

③近世

○戦国・安土桃山時代

室町幕府が衰退していき、各地で戦国大名が互いに勢力を争い、戦国時代が始まる。この時期、浄土真宗の本願寺門徒は一向一揆勢として加賀から越前に度々進攻した。坂井郡に勢力を張った堀江氏をはじめとした国人や国衆と呼ばれる中小領主も、一向一揆に抵抗している。

永正 3 年（1506）に加賀一向一揆が侵入して、戦国大名の朝倉氏と九頭竜川を挟んで、大規模な合戦が繰り広げられた。この合戦に敗れた本願寺門流の有力寺院は隣国の加賀へと亡命した。また、霊峰と呼ばれる白山ともゆかりがある豊原寺（丸岡町豊原）は、奈良時代に泰澄（たいちょう）によって開創されたと伝わる寺院で、天正 2 年（1574）の越前一向一揆では一揆の拠点になった。豊原寺内には数多くの僧侶のほか、甲冑師（かっちゅうし）・鍛冶師（かじし）などの職人が居住し、一大都市として繁栄し、後世には豊原・小野・吉谷を併せて絶大な勢力を誇った。天正元年（1573)、織田信長によって朝倉氏が滅ぼされると、翌年、越前では大規模な一向一揆が起き、その勢力は越前国一国を支配するまでに至った。しかし、天正 3 年（1575）には、再度侵攻してきた織田信長勢によって、一揆勢力は掃討され、豊原寺もことごとく焼き払われた。一向一揆を平定した織田信長は、柴田勝家に越前を支配させた。勝家の甥・勝豊は、豊原の地に居城を置いたが、その後、勝豊は豊原を離れ、西方の小丘に城を築いた。そして城を移すにあたり、勝豊は、豊原に居住していた職人や寺社を城下に移した。これが城下町丸岡の始まりとなる。

○江戸時代

徳川家康によって、江戸幕府が開かれ、約 260 年もの江戸時代が始まる。越前国全体は、結城秀康を初代藩主とする越前藩が統治していた。丸岡城は越前藩の有力家臣が居住する支城であった。寛永元年（1624）に福井藩から独立して丸岡藩が成立し、越前藩附家老であった本多成重が幕命により初代藩主となると、丸岡藩主の居城となった。丸岡藩は初め本多家が治めたが、その後は、日向国延岡（宮崎県延岡市）から越後国糸魚川（新潟県糸魚川市)、さらに丸岡に入った有馬家が治めた。

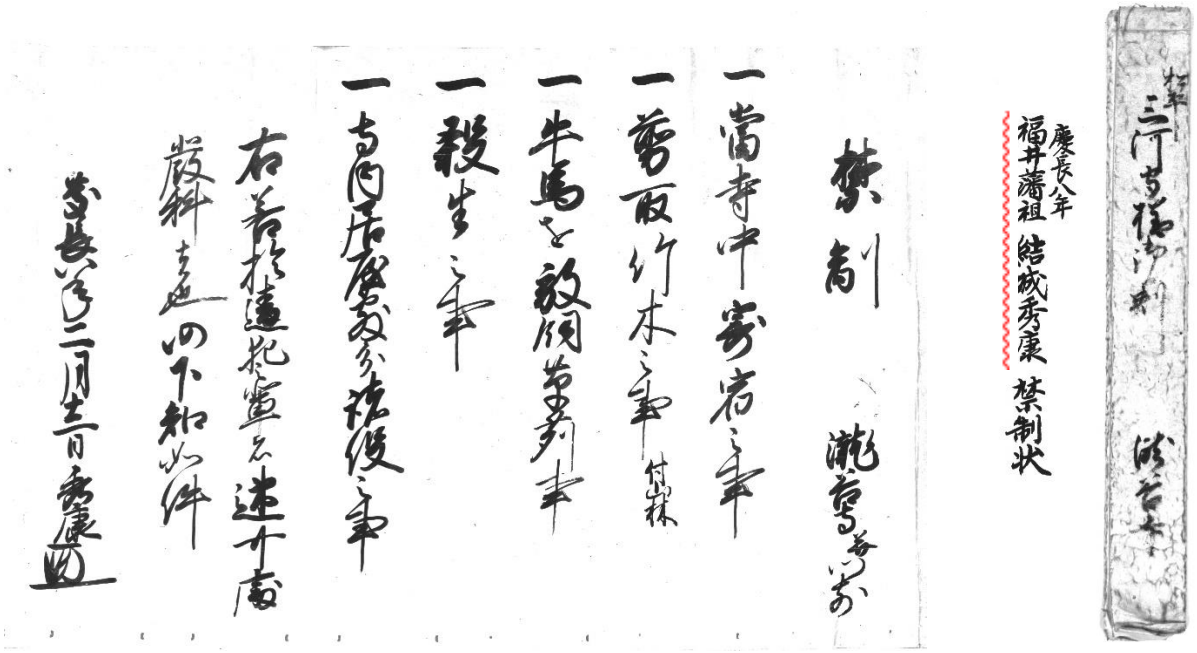
三国湊は重要な湊として、福井藩が治め、金津奉行が管轄した。河村瑞賢により、日本海沿岸から津軽海峡を通って太平洋に出て江戸に入る東廻り航路や、日本海沿岸から関門海峡・瀬戸内海を通って大坂に入る西廻り航路が開発されると、米や物資が集まる三国湊は、やがて北前船の寄港地として大いに発展した。

江戸時代の北陸道は、越前国の南から板取、今庄、湯尾、鯖波、脇本、今宿、府中、上鯖江、水落、浅水、福井、舟橋、長崎・舟寄、金津、細呂木を経て、加賀へとつながっていた。坂井市域では、現在の春江町正蓮花、同寄安、丸岡町南横地、同北横地、同長崎、同舟寄、坂井町若宮、同長畑、同下新庄、同五本、同上関、同下関を通り、このうち長崎と舟寄に宿駅（しゅくえき）が設けられていた。

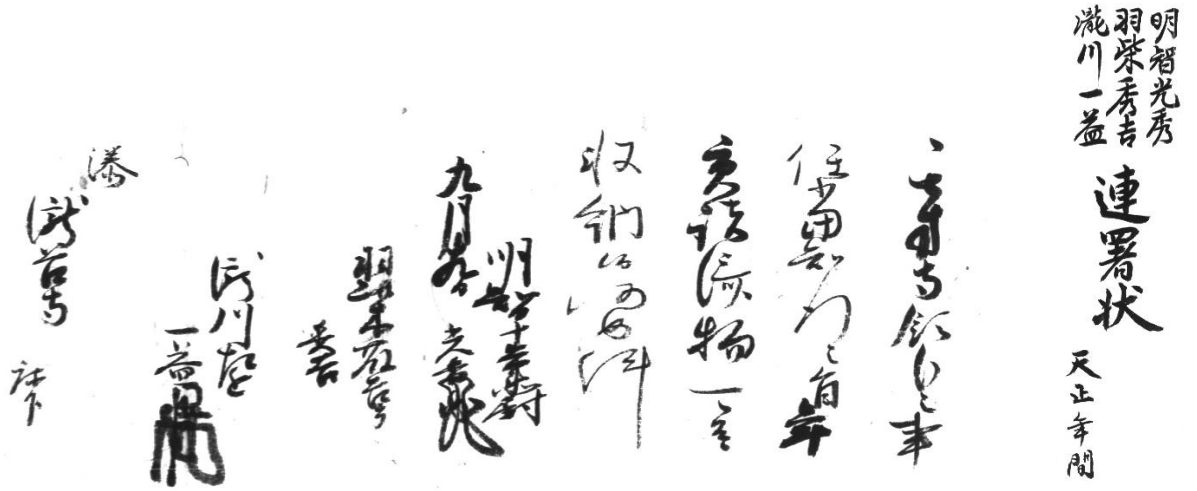
九頭竜川・竹田川・兵庫川・田島川など、河川が縦横に走る坂井平野では、川舟を用いた河川交通が発達していた。川舟は年貢米の輸送などに用いられた。川沿いの集落の河戸（こうど）と言われる船着場から積み込まれた年貢米は、下流に位置する三国湊に集められ、海運で大坂まで運ばれていった。

江戸時代においても、村々の農地を灌漑する用水は、坂井平野の人々にとっての生命線であった。鳴鹿大堰でせき止められた九頭竜川の水は、取水口や水門で分水され、118 か所の村を潤していた。用水があった「高椋郷」「磯部郷」「十郷」の村々では、鳴鹿大堰の築立や補修、取水口の江浚（えざら）えや修理などを負担していた。一方、分水された各用水路の管理は、大連家や土肥家のような、「井奉行」（井守、井番とも言う）の家が務めた。また、新江用水をはじめ十郷用水の幹線から分流する新たな用水も開削された。このほか、江戸時代に発見された竹田鉱山は銀や銅が産出したと言われ、江戸時代終わりには丸岡藩によって大鉱脈が発見された。当時は争乱の時代であったことから、軍備拡充のために盛んに採掘された。

真宗門徒が多い本市では、集落単位での講も盛んに行われていた。江戸時代には、多くの真宗門徒にとって、最も身近な信仰の拠点は本尊を安置した道場であった。現在でも各地区の寺や区民館、道場、個人宅などで集落単位ごとに講や仏事が行われている。



瀧谷寺に対する結城秀康禁制



瀧谷寺に対する明智光秀・羽柴秀吉・滝川一益連署安堵状

瀧谷寺は戦国時代、安土桃山時代、江戸時代でそれぞれの領主、大名から安堵状を受けている

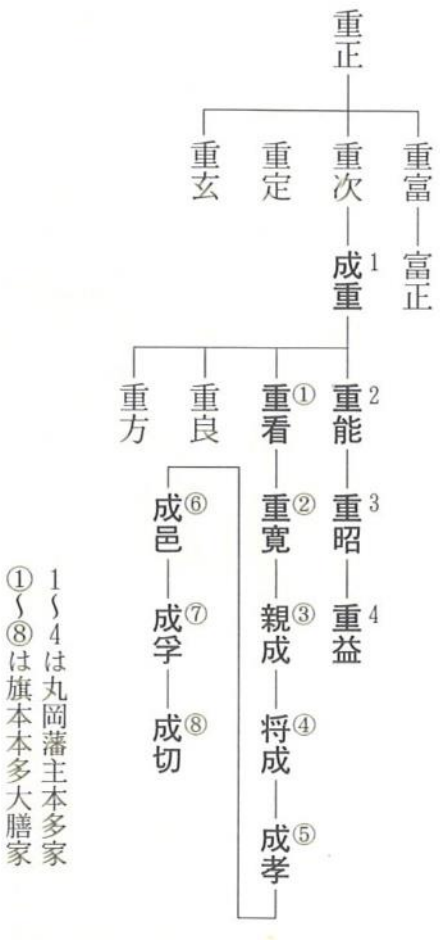
（瀧谷寺所蔵資料）

越前藩（福井藩）と丸岡藩

慶長５年（1600）関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、直ちに論功行賞を行い、下総城主の結城秀康に越前 68 万石を与えた。

結城秀康が越前に入り、越前藩（後の福井藩）が成立すると、家老今村盛次を丸岡に配置した。盛次はその領地滝谷をさらに九頭竜川岸まで拡張しようとした。

江戸前期には、九頭竜川へ入る船はすべて三国湊で取り調べを受けることとしたため、滝谷に入る船も三国までいかなければいけなくなり、港としての発展を封じられ、丸岡藩主本多成重は厳重抗議した。

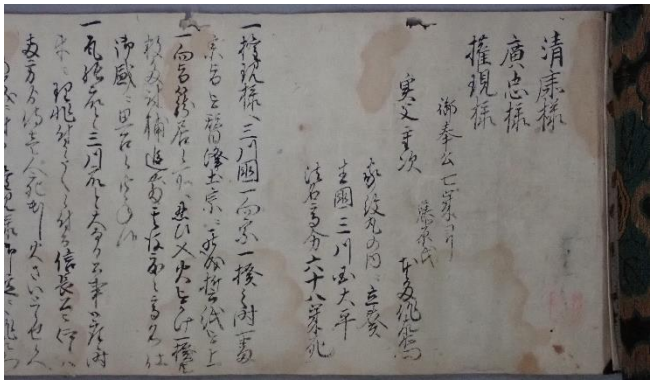


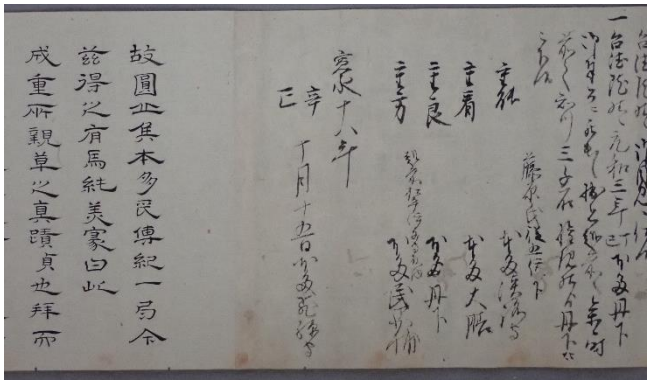
丸岡藩主本多氏・旗本本田大膳氏系図
（『新修 坂井町誌』）

丸岡藩主有馬氏歴代系図
（『新修 坂井町誌』）

『広報さかい　平成 25 年 11 月号』より
旧藩主本多家の遺品が現存しており、平成 25 年に展示された

横矧二枚胴具足（本多家資料）
（国立歴史民俗博物館蔵）

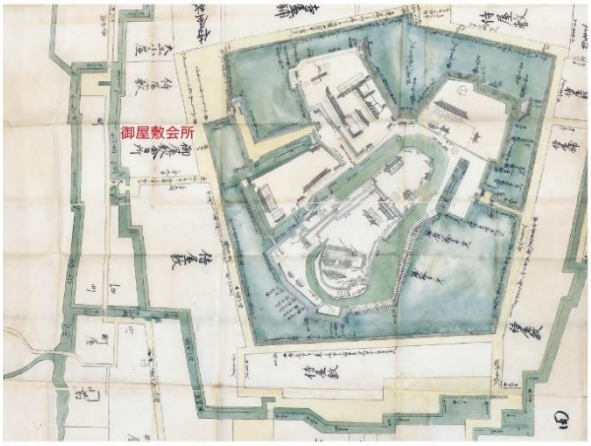




先祖由緒書（本多家資料）
（国立歴史民俗博物館蔵）

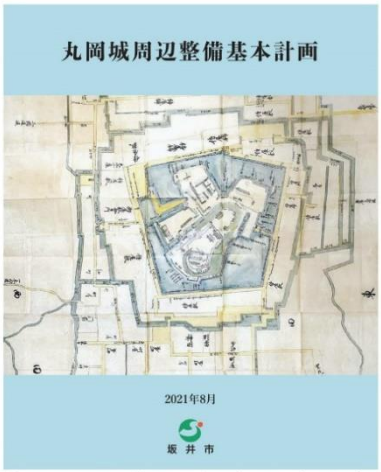
広報さかい 令和5年6月号 No.207
令和5年6月14日発行

丸岡城の精緻な城下町絵図を新たに発見して



新発見の丸岡城下町絵図から本丸・大手門の付近

御屋敷会所の存在は新発見で、米塩など重要物資納入、勘定方武士の仕事場と推測、藩の経済部門である（金沢城では御算用場と呼ぶ、映画「武士の家計簿」）。水路の細かい屈曲もわかる。



丸岡城周辺整備基本計画（2021年8月）計画書は、全80頁。65～80頁は、越澤明氏編集執筆の城下町絵図集である。

江戸時代の城下町絵図は味わいがあり、人気もあり、現代の刊行物や歴史博物館の展示にも使用されることが多い。江戸の地図には御城（天守・二の丸・内堀）のみを描いた城絵図と城下町全体を描いた城下町絵図の二種類がある。

江戸時代の有力大名は兵学（軍事学）のために全国の城絵図を収集した。加賀藩、岡山藩、広島藩が収集した城絵図は現在、地元の公共図書館で公開されている。

江戸幕府は正保元年（1644年）、全国の大名に城下町図の作成と提出を命じた。この131城の正保城絵図は幕府の軍事機密資料であり、戊辰戦争で江戸城に入った官軍が接収して北越奥羽戦争で使用した。現存する63城は国立公文書館が公開しており、1986年に重要文化財に指定され、丸岡城も含まれる。

本年3月に坂井市教育委員会が古書籍商から購入した丸岡城下町絵図の発見者は私である。この地図は正保図よりも精緻である。道幅、水路の幅と深さが記載され、侍屋敷と町屋の形も現代図にかなり近い。丸岡藩本多家が城下町全体の維持管理と防備（侍屋敷と町屋の管理、道路・水路の管理、城門の警備など）のために作成した地図である。

私は「丸岡城周辺整備基本計画」の委員長を務めたが、計画書の中に委員長の編集解説で城下町絵図集を掲載することになった。そのため全国の公共図書館と古書店を探索した。群馬県の収集家古書籍商の膨大で目録未掲載の所蔵品から、図名も志州鳥羽であったが、発見して撮影した。重要な地図であるため「丸岡城周辺整備基本計画」の表紙に使用し、計画書の中でも詳しく解説した。

この新発見の丸岡城下町絵図は来年完成する丸岡城観光情報センターで複製が展示されて大評判になると予想する。また、小中学校で郷土史を学ぶときにも活用され、地元まちづくり活動に役立つと期待する。

寄稿者

越澤　明（こしざわ　あきら）
北海道大学　名誉教授

丸岡城周辺整備基本計画策定委員長を務め、計画を策定。現在は、坂井市歴史まちづくり推進協議会長を務める。

また、愛知県犬山市と岐阜県美濃市の歴史まちづくり協議会長も務めている。

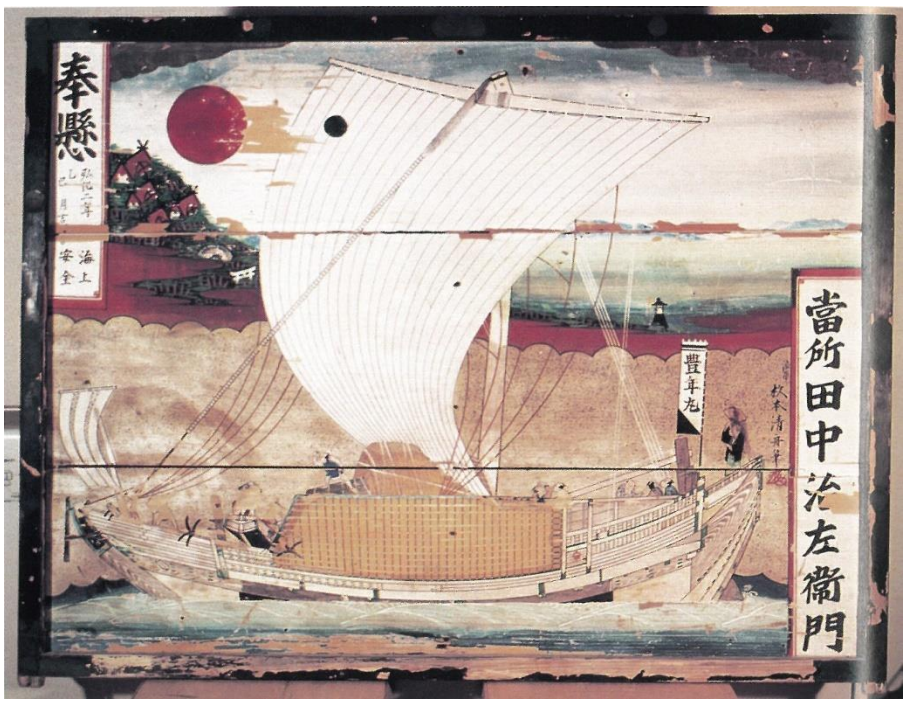
編集後記

▼人生初の音楽フェスに参加。カメラを向けると楽しい・大好きがあふれるキラキラの来場者たち。思わず笑みがこぼれる大満喫の一日でした。（恵）

▼Happy Birthday to you 生まれてきてくれてありがとう。あなたの夢が叶うことは、私の幸せ。これからのあなたに私は何を残せるだろう。（春）

■今月の表紙
坂井市アンテナショップのオープンを祝う高橋愛さんとスタッフ

■発行／坂井市　■編集／秘書広報課
〒919-0692 福井県坂井市坂井町下新庄第1番地
TEL 0776-66-1500(代) FAX 0776-66-4837
URL https://www.city.fukui-sakai.lg.jp/ E-mail koufou@city.fukui-sakai.lg.jp



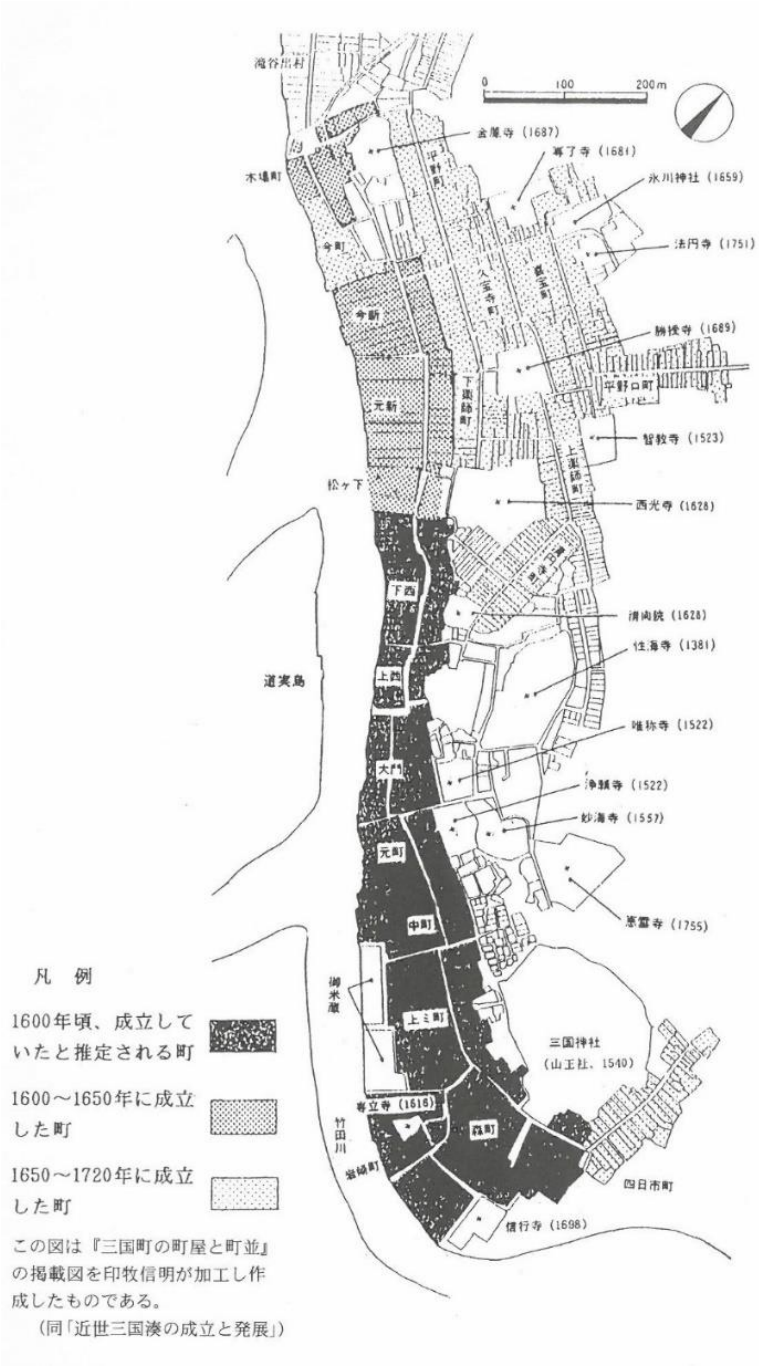
弁才船（北前船）の様子が描かれている。

ベザイ船絵馬（弘化２年）（大湊神社所蔵）（『三国湊小史』より）

三国湊の発展

近世の三国湊は、初期の「三国」と、新たに開発された「新町」とに二大別される。初期の町「三国」は、17世紀中葉の正保期までに形成された町々で、「新町」はそれ以降新たに開発された町である。三国湊の政庁は正智院にあって、ここで問丸・庄屋が町役人として職務を掌った。藩の命令は金津奉行から問丸へ、さらに庄屋を通じて各町の町庄屋へ伝えられ、町庄屋が一般町民に伝達するのが普通だった。

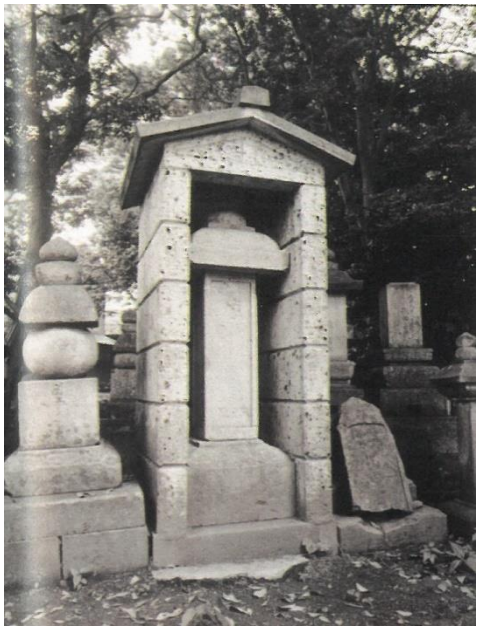
問丸は、初めは問屋と同様、職業名であったが、これが後に役名になる。最初は５人の問丸が三国の事務を執ったようである。宝暦年間には３人となった。



近世三国湊の発展図（『三国湊小史』より）

韃靼漂流記

江戸前期の寛永 21 年（1644）４月１日、三国浦新保村の竹内藤右衛門と子の藤蔵舟二艘・並びに国田兵右衛門一艘に 58 人が乗り組んで、松前（現北海道）貿易の目的を出帆したところ、佐渡沖で大風に遭遇、日本海を漂流し、韃靼国すなわちマンチュリアの清領内、現在のロシア領沿海州ポシェット湾付近に漂流した。



韃靼漂流者供養塔　　竹内藤右衛門の墓

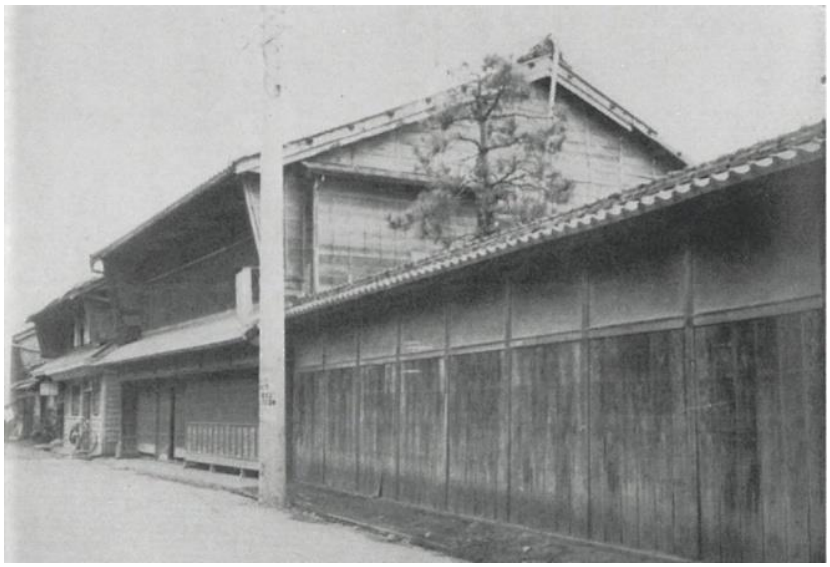
（いずれも『三国湊小史』より、性海寺）

森田家

三国湊の豪商である森田家の先祖は、朝倉氏滅亡後に三国湊の城主となり台頭した。信長・秀吉に協力して地位を確立し、兄は加賀藩の海賊取締方、舟奉行。弟は越前藩の三国湊の頭町人となり、奥羽～敦賀の海運に強い影響力を持った。

一族は戦国末期から元禄初期に至るまで問丸筆頭の地位を維持し、初期の町場の中心付近にある元町に屋敷を構え、古刹性海寺の大檀越でもあった。安土・桃山期の天正３年（1575）織田信長の越前一向一揆平定の際、森田三郎左衛門（道空）は問丸の立場から信長に忠誠を尽くし、同５年には能登に侵攻した上杉謙信の動向を海上から偵察し、同時に柴田勝家から越後・越中・能登船の入津停止を命じられるなど、信長支配下の商人として活躍した。

江戸時代に入り、廻漕業を通じて北国領主との経済的結びつきが強くなった。寛永５年（1628）には二代目屋号衛門は問丸職の他に、船持仲間を支配する舟道、領主米や承認荷物を湊より廻漕する羽海船支配を勤め、港の自治や廻船業に対して絶大な影響力を保持した。



森田家住宅（『三国湊小史』より）

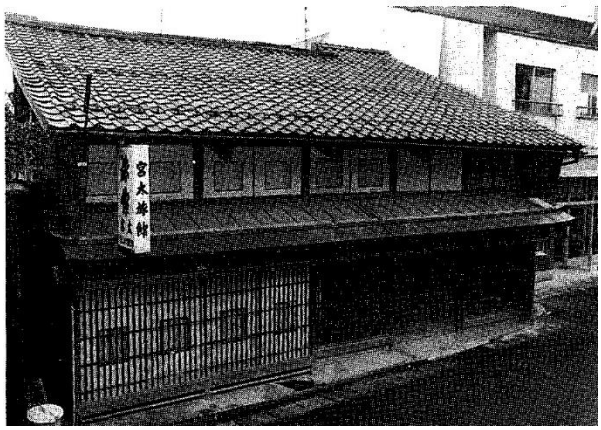
内田家

先祖内田十内（のち十兵衛）は朝倉氏に仕えた武士と伝えられる。江戸時代には福井城下祝町で酒商売と糀業を営んでいた。江戸中期の元禄 16 年（1703）惣右衛門の時、三国湊へ出店し、三国内田家の始祖となった。屋号を室谷と称し、元新町の川方へ店を構え、搗米屋と麹商を営んだ。二代惣右衛門の時、廻漕業を始め、五代惣右衛門の代に発展を遂げ、三国家と共に港の二代豪商に急成長した。

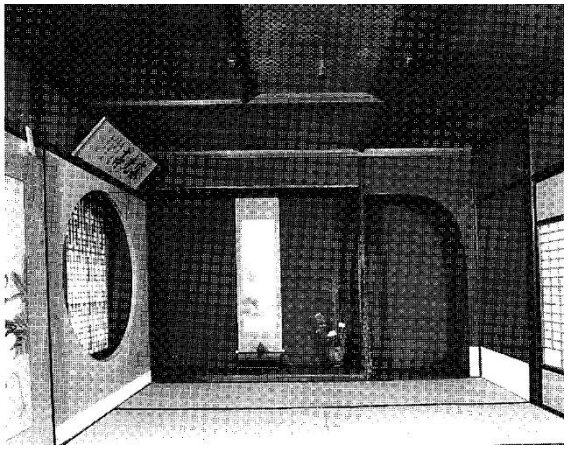
福井藩は内田家の経済的貢献に対して、知行や扶持を与えるとともに、五代惣右衛門は文化元年（1864）に年始御礼と門松を許され、苗字勝手として内田の姓を名乗るようになり、文政２年（1819）には金津奉行直支配となって帯刀が許されている。

宮本太吉家

宮本家は、宮腰屋太吉を名乗る廻船業で、青森湊まで航行していたという記録がある（『三国湊小史』）。明治初年には旅籠屋宮多旅館を営んできた。『報告書』でも建物としての価値が評価されている。



建物外観



蔵座敷の床の間

（いずれの写真も『三国町の民家と町並み』より）

山王祭

19 世紀中葉頃に作られた「性海寺年中行事標要集」によれば、４月の申の日（旧暦４月 20 日）、三国湊惣社山王宮の祭礼が行われた。この日の前日、性海寺住職と伴僧二人は神輿に乗って総勢 18 人で山王宮に出かけた。祭礼当日は、門前の石橋むかいの正面まで神輿の渡御があり、院代役僧のうち一人が出て法楽を行った。

三国の文化・文芸

近世に入ると、三国湊では町人が経済的に台頭し文化の担い手になった。江戸前期には、三国、新保、滝谷などの九頭竜川河口集落で俳諧が隆盛した。江戸中期には、松尾芭蕉の高弟去来が三国に遊し、句を残している。

宝永４年、『日和山』が刊行されると、元文２年（1737）に金鳳寺境内に初雪塚を建立した。

三国町人、とりわけ商人の中で俳諧に親しむ者が増えていった。彼等の教養嗜みは遊び相手になった遊女たちに浸透し、遊女の中から優れた俳人が現れた。女流俳人と喧伝されている哥川である。通称を豊田屋ぎんといい、俳句を永正寺永言（巴浪）に師事した。代表句に「奥底のしれぬ寒さや海の音」がある。

近世の建築彫刻として、三國神社本殿向拝装飾が代表的な作品である。三国はまた車箪笥や船箪笥の産地として知られている。三国仏壇は京仏壇の系統に属する。

三国湊は釈谷石の輸出港であり、密教寺院を中心に古い石造遺物が多い。釈谷石は福井産地から足羽川・日野川・九頭竜川の水運を利用して川船で三国湊に運ばれ、当湊から日本海沿岸各地へ移出された。墓石の場合、越前独特の荘厳様式がこの石に託されて越前仏教文化として各地へ伝播した。

三国湊における丸岡藩領の茶屋町

越前藩が分割されて、丸岡藩が独立した後、三国湊の管理については、越前藩とされた。三国湊の大部分は越前藩領となり、一部分が丸岡藩領（茶屋町・三国遊郭）となった。三国遊郭は、日本海の中でも規模が大きく、その結果、文化作品や歌舞伎の舞台となっている。

三国遊郭の最高ランクの遊女を指す小女郎（島原では太夫）をめぐる物語がある。福井藩士の子である近松門左衛門が著名な台本を書き、これが、歌舞伎の著名な演目となった。元禄 12 年（1699 年）近松門左衛門の作「けいせい仏の原」である。また、もう一つの著名な題材として、玉屋新兵衛と三国小女郎の物語がある。

観音院の門（坂井市指定文化財建造物）

坂井市春江町本堂にある観音院の場所は、江戸時代に福井藩領であった。本堂地区に伝わる伝承で、福井城内の建物を拝領したとされている。旧福井藩の諸文書による史実が未確認であるが、上質な門であるため、福井城の遺構である可能性が高い（『観音院の門』（福井工業大学研究紀要、第 34 号、2004 年）。

福井地震で一度倒壊し、その一部はすでに欠損したものの、主要部分を使って、平成 15 年（2003）に応急的に組み立て、収蔵庫内で保管されている。

観音院の門に関する学術的見解について、本計画では下記に益田委員の文責による報告書を掲載する。

観音院の門

坂井市指定文化財「観音院の門」の復原修理活用の重要性 20231014益田兼房

1．門の現状（坂井市春江町本堂1-30　八幡神社境内　倉庫内にて保管）

2023年9月29日午前に約30分間、坂井市のご案内で、越澤明歴まち協議会会長と益田兼房委員が、現地調査を行った。坂井市文化課資料の説明によれば、1948年福井地震で倒壊後に主要部材を神社境内倉庫で保管していたのを、2003年に組み立て補強された状態である。屋根材は無く、垂木や貝形柱など一部部材を失っているが、なお木造の主要各部材はほぼ全て残存しており、復原修理が可能な状況にある。

残存部材は、表面の風蝕状況などから、少なくも二つの異なる時期からなる。全部材について慎重な分析考察を行い、文化財修理技術者による彩色を含めての質の高い復原修理と修理工事報告書刊行を行えば、県指定、もしくは国指定文化財の価値の回復が、可能な状況にある。

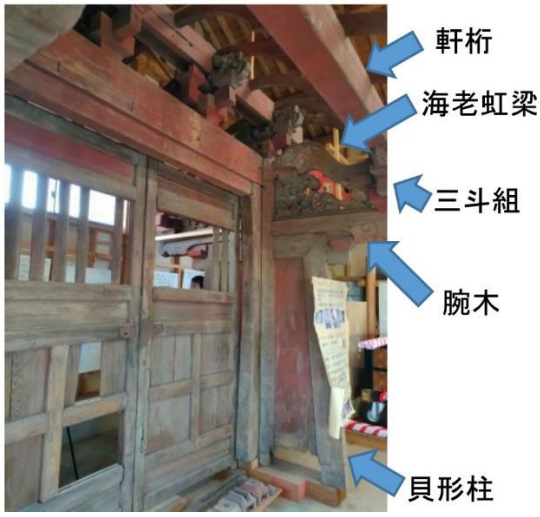
八幡神社境内の門収蔵倉庫外観

坂井市指定文化財「観音院の門」全景
（左側貝形柱欠失）

2．門の年代・特徴・価値など

門の由緒と年代は、坂井市文化課資料によれば、以下のようである。はじめ福井藩の東照宮は城の外、神明神社付近にあったが、寛文10年（1670）に福井城内北三の丸で再建された。この門の建築年代は江戸時代前期まで遡のぼるので、再建された東照宮の平唐門の可能性があり、その後、廃藩置県後の明治5年（1872）頃以降に、松平家に関わりの深い本堂地区の観音院に移転した、とされる。

一般に、平唐門は古来高貴な邸宅や廟所に使われ、構造上2本の親柱で重い屋根を支えるため、前後に控えが必要である。屋根が大きいこの門では、左右両側に下幅で1m程の厚い見事な築地塀があったらしい斜めの貝形柱が付属し（左側欠失し支柱）、これが門の当初材である腕木とその上の海老虹梁三斗組、さらに軒桁を支えている。すなわち、残存部材からは、この門の当初の構成は、左右に立派な築地塀が想定され、高貴な屋敷か廟所の門であったと推察される。



また、部材は少なくも二つの異なる時期からなるが、大半を構成する当初材は、建築様式上からは、腕木の絵様、頭貫木鼻の絵様の線の細いこと、海老虹梁の肩の雲紋の彫り方や、その下の花木彫物の様式などからは、江戸時代の寛文年間と言うよりむしろ、桃山時代早期の関西圏の意匠・気風を伝えていることが注目される。

今後の、福井藩初期の古文書の調査が不可欠であるが、京都辺の相当な施設（例えば豊臣秀吉が天正15年（1587）建設し、1595年に破却した聚楽第では、その北門は移築されて京都大徳寺方丈の唐門と伝え、国宝建造物）等からの移転も含めて、今後広く検討すべきと考えられる。

海老虹梁の肩の雲紋彫りは浅く緩やか　　頭貫木鼻絵様渦線は細い

右側面：前後の貝形柱で腕木を支えて、深い軒の屋根を支える。

右側面の詳細：腕木の　絵様線は細く真円に近い。頭貫や肘木拳鼻の絵様線も同じく細い。

3. 門の復原修理の重要性と期待される活用効果

現状では、門は倉庫内で仮設の組立状況にあり、本堂地区で大切に部材保存をされてきたことに関係者のご尽力に深甚の敬意を表するものであるが、小規模地震での倒壊によるさらなる部材の損壊や、火災の危険性は排除できず、市指定文化財として早期の保存復原修理が望まれる。

その文化財的価値は、今後の福井城松平氏関係の文献調査や関西圏の建築類例様式比較調査などにより、年代や由緒など、坂井市や福井県内全体での歴史的建造物のなかでも、大いに評価が高まる可能性がある。大徳寺唐門と肘木曲線などは異なるが、関西圏の各地から優秀な大工が集合競争して造営した施設の一部分の可能性は、今後の検討の中で明らかとなろう。

経験のある文化財建造物修理技術者の監督の下に、京都の重文建造物修理に関わる大工と彩色修理専門家による復原ができれば、一種の工芸品的な美しさは見違えるほど高まり、福井県の文化的魅力を対外的に観光客等に発信するシンボル的効果も発揮できると見られる。

復原修理後の保存活用の方法は、例えば坂井市の三国翔龍博物館の所蔵品として、これを観光上効果ある屋内に館外貸出展示することで、全国的な文化発信をすることも期待されよう。

越前萬歳

新春の雪の中、新年を言祝いで越前の家々をまわっていた、越前萬歳。昭和 46 年（1971）に記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財とされ、平成 7 年には国の重要無形民俗文化財に指定された。

越前萬歳は、かつては野大坪萬歳（のおおつぼまんさい）ともいわれたもので、新春の祝福芸の一つである。越前市上大坪地区や味真野地区で伝承されてきた。その起源については不明ながら、継体天皇にまつわる伝説などがある。江戸時代には、越前の各藩のほか、加賀藩、大聖寺藩でも演じられていた。

越前萬歳には歌詞が 48 段あるといわれてきた。人気の高い演目である「お早良作（はやりょうさく）」（注）については、坂井市長畑、旧北陸道に面した一里塚があつた場所に、道を挟み供養塔と地蔵堂が建立されている。

（注）加賀藩士と町家娘が身分の差を超えて駆け落ちし、当地で死去した。現在に至るまで当地区では慰霊を行っている。

お早良作の地蔵堂

④近代

〇明治時代以降

越前地域北部の全ての主要な河川は最終的に九頭竜川に合流し、三国湊から日本海に注がれる。そのため、三国湊には上流から運ばれてくる土砂が堆積し、それが長年の課題となっていた。土砂の堆積で港の水深が浅くなり、港湾としての機能が低下するため、三国の豪商らが県や政府に改修を求めた結果、明治 9 年（1876）にオランダ人技師 G.A. エッセルが派遣されることになった。エッセルが設計し、明治 15 年（1882）に完成した三国港（旧阪井港）突堤は、日本初の近代的な港湾修築工事の跡である。現在もその機能を果たしている貴重な国の重要文化財となっている。

明治新政府が道路の整備、鉄道の敷設を進めていくにつれ、船の往来に頼る三国湊の商業活動は減衰していった。大正時代に入ると、発動機船を導入した底曳網漁業がはじまり、三国港は商港から漁港へと転換していった。

戦国時代からの由緒を持つ豪商の森田家は、廻船業の衰退により、倉庫業・銀行業へと転業した。森田銀行は、加賀銀行（石川県）、勝山野村銀行を合併・買収するなど、福井県下有数の銀行へと発展した。

明治 30 年（1897）9 月には、北陸線沿いの福井―小松間が開通し、市内に初めて鉄道が通った。地元の熱心な鉄道敷設運動の結果、明治 44 年（1911）には三国支線が開業、その後も大正 4 年（1915）には、北陸本線の上新庄駅と丸岡市街を結ぶ丸岡鉄道が開業した。このほかにも、永平寺鉄道や三国芦原電鉄が開通し、大正時代から昭和時代の初めにかけて、市内における鉄道は全盛期を迎えた。こうした鉄道の広がりは、駅周辺の商店街の発達をもたらした。

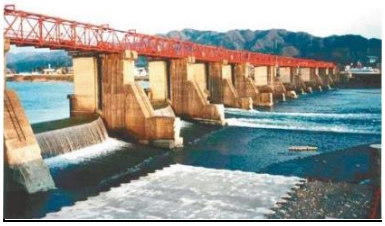
旧島崎家住宅はなれ
春江ちりめん会社である島崎繊維創業者の自邸。

明治 20 年（1887）頃から輸出向け絹織物である羽二重を織る織物工場が広がり始めた。明治 42 年（1909）10 月には、江留上への送電工事が竣工し、急速に手織機（てばた）から動力織りの力織機（りきしょっき）への転換が進んだ。さらに、同業組合による品質改善や新製品の試織の結果、大正時代の中頃に春江村の機業は最盛期を迎えた。

第 2 次世界大戦では、多くの人が命を落とし、市内各所には慰霊碑、忠魂碑が建てられている。終戦前の昭和 19 年（1944）には、疎開のため、詩人・三好達治が雄島村米ケ脇（三国町米ケ脇）に身を寄せた。昭和 24 年（1949）までの間、三好達治

は地元の文学者や三好を訪ねてくる文学者たちと交流を深めた。

用水の取水口であった鳴鹿堰は、昭和 22 年に国営九頭竜川農業水利事業に採択され、8 年の歳月をかけて可動式のゲート５門を備えた鳴鹿堰堤として整備された。昭和 50 年代には災害への応急措置に関わる国の通達や水害の発生などを受け、九頭竜川水系工事実施基本計画が改定され、老朽化した旧鳴鹿堰堤の更新が課題として挙げられた。平成２年（1990 年）度から洪水時の流下能力を高める改築事業が着手され、平成 16 年（2004）に九頭竜川鳴鹿大堰として完成した。



以前の鳴鹿堰堤

現在の九頭竜川鳴鹿大堰

昭和 23 年（1948）におこった丸岡町付近を震源地とした福井地震では、昭和 15 年(1940)～17 年(1942)に解体修理を行った丸岡城天守も倒壊した。城下周辺では、建物の倒壊のほか、地震による火災が発生し、鎮火に伴う浸水も含めて地域に残っていた資料類も被災した。市内の一部では、三国町など建物の倒壊を免れた地域もあった。倒壊した丸岡城天守は、昭和 26 年（1951）から約４年をかけて修理工事を終え、現在のような姿となっている。

昭和 41 年（1966）、春江町藤鷲塚に福井空港が開港したほか、道路の整備や、九頭竜川への架橋が進められ、交通体系の近代化が推し進められていった。こうした交通網の整備は、近代産業の発展の導火線にもなった。例えば、福井国体関連事業として国道 8 号のバイパス道路の整備が進められ、商業施設・飲食施設の立地が促進された。JR 北陸本線による輸送日数・コストの削減は、県内の輸出向け絹織物業の飛躍に拍車をかけた。北陸線上の金津・丸岡・森田・大土呂・鯖江などの駅周辺 3～4 ㎞ほどの村々で新たな機業地が広がっていき、春江村の輸出向け羽二重機業がその典型である。

昭和 46 年（1971）、産業構造の改善と県民所得の向上を図るため、九頭竜川左岸の三里浜に臨海工業地帯の造成を計画し、港名を福井港と変更、港湾審議会第 46 回計画部会では「福井港港湾計画」が新たに承認された。その後約 20 年の歳月をかけて建設工事が行われつつ、昭和 53 年（1978）に共用が開始された。

平成 18 年（2006）には、坂井郡の三国町、丸岡町、春江町、坂井町の４町が合併し、人口規模で福井県下第２位の市となる本市が生まれた。

（２）関わりのある人物

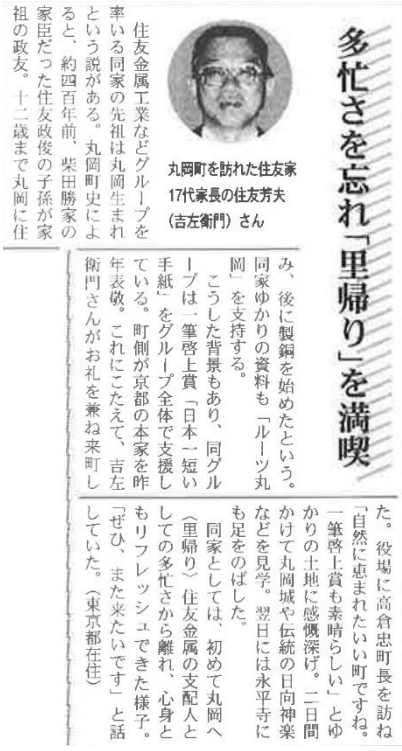
本多成重　元亀３年（1572）～正保４年（1647）

徳川氏の家臣・本多重次の長男。重次が陣中から妻に書き送ったとされる「一筆啓上、火の用心、お仙泣すな、馬肥やせ」という手紙は、簡潔に要点をとらえた模範的な手紙文として名高いが、この「お仙」（仙千代）が成重を指す。若年の福井藩主松平忠直の補佐のため松平家の家となり、慶長 18 年（1613）本多成重が丸岡城主となる。寛永元年（1624）福井藩が福井藩、大野藩、勝山藩、丸岡藩などに分かれ、丸岡藩 4 万 6300 石が立藩した。本多成重が初代丸岡藩主となり、丸岡城下の整備や新江用水の開削などに尽力した。

本多家歴代墓所
（市指定文化財）

住友政友　　天正 13 年（1585）～慶安５年（1652）

日本の三大財閥（企業グループ）の１つ、住友グループの祖業は江戸時代の銅精錬（屋号は泉屋）である。住友家の初代（家祖）である住友政友は天正年間年（1585）、丸岡城下町で武士住友長行の次男として生まれた。当時の領主は丹羽長秀であり、丸岡城代は青山宗勝であった。住友政友は両親の希望で、12 歳で京に上り僧となったが、還俗して町人として商い（出版、製薬、銅吹き）を興した。娘婿の２代目住友友以は京都から大坂に移り、家業を発展させ、大坂で最大の銅吹き所（銅精錬所）を経営し、貿易商、両替商も開始した。４代目住友友信は別子銅山を開発し、鉱業と金融を柱として全国でも有数の有力な商家に発展した。



多忙さを忘れ「里帰り」を満喫

丸岡町を訪れた住友家17代家長の住友芳夫（吉左衛門）さん

住友金属工業などグループを率いる同家の先祖は丸岡生まれという説がある。丸岡町史によると、約四百年前、柴田勝家の家臣だった住友政俊の子孫が家祖の政友。十二歳まで丸岡に住み、後に製銅を始めたという。同家ゆかりの資料も「ルーツ丸岡」を支持する。

こうした背景もあり、同グループは「一筆啓上賞「日本一短い手紙」をグループ全体で支援している。町側が京都の本家を昨年表敬。これにこたえて、吉左衛門さんがお礼を兼ね来町した。役場に高倉忠町長を訪ね「自然に恵まれたいい町ですね。一筆啓上賞も素晴らしい」とゆかりの土地に感慨深げ。二日間かけて丸岡城や伝統の日向神楽などを見学。翌日には永平寺にも足をのばした。

同家としては、初めて丸岡へ〈里帰り〉住友金属の支配人としての多忙さから離れ、心身ともリフレッシュできた様子。「ぜひ、また来たいです」と話していた。（東京都在住）

東京福井県人会報（H8.9.25）より

岸名昨嚢（さくのう）　江戸中期

通称を惣助、屋号を新保屋と称した材木商であった。松尾芭蕉の門人各務支考は、全国各地を行脚して美濃派と呼ばれた俳風を普及させており、三国では岸名昨嚢（さくのう）が支考の門人として美濃派の俳壇を樹立した。日和山の金鳳寺を拠点として日和山吟社を立ち上げ、初代宗匠となった。

日和山吟社の拠点となった金鳳寺

豊田屋哥川（かせん）　江戸中期

日本海屈指の北前船貿易の港として繁栄を極めた三国には、遠く江戸にも名を響かせる遊郭が営まれた。「家数三百七十、傾城八十五人、流行長谷川」という記録があり、高い教養や品格が謳われる遊女を多く抱えた滝谷出村の遊郭で、とりわけ評判が高かったのが荒屋町の泊瀬川（哥川）であった。永正寺巴浪に俳諧の手ほどきを受けたとされ、「奥そこのしれぬ寒さや海の音」などの句を残している。

哥川の句碑がある妙海寺

杉田定一　嘉永 4 年（1851）～昭和 4 年（1929）

坂井郡鶉村波寄（現福井市）の大庄屋杉田仙十郎の長男に生まれた。明治 23 年(1890)の第 1 回衆議院議員選挙に立憲自由党から立候補して当選し、途中 1 回の落選を挟んで第 10 回総選挙まで当選を続けた。福井県内では、明治 29 年（1896）に公布された旧河川法の第 8 条を適用して国事業として九頭竜川の治水事業を実施できるよう働きかけ、巨額の私財も投じて河川改修の実現に奔走した。そのほか、地租改正や絹織物業の発展、三国鉄道の敷設などに尽力し、本市の産業の発展と社会基盤の整備に多大な功績を残した。

杉田定一
『杉田鶉山翁』より

酒井利雄　明治 24 年（1891）～昭和 44 年（1969）

鳴鹿村に生まれ、鳴鹿村長や福井県会議長、衆参議員などを務めた。農政や土木に精通し、鳴鹿堰堤の建設を行なった。また、永平寺鉄道の永平寺口・永平寺間（大正 14 年（1925））、永平寺口・金津間（昭和 4 年（1929））の開通などに尽力し、永平寺参詣者の利便性が大幅に改善された。

酒井利雄
『酒井利雄伝』より

高見順　明治 40 年（1907）～昭和 40 年（1965）

三国町平野に、当時の福井県知事阪本釤之助（さんのすけ）の子として生まれる。長編小説「故旧忘れ得べき」が第一回芥川賞候補作となり、作家としての地位を確立した。晩年には、近代文学の資料の散逸を防ぐため、日本近代文学館の建設に尽力した。私生子として生まれた高見は三国を忌まわしい出生の地として長く帰ることはなかったが、徴兵検査のため、19 歳の時初めて三国を訪れている。「荒磯」という詩の冒頭では、故郷三国への思いを「おれは荒磯の生れなのだ」とうたっている。現在、荒磯遊歩道に自筆の字体で刻まれた詩碑がある。

高見順
『高見順日記』より

４．文化財等の分布状況

坂井市には、国・県・市の指定・登録文化財が 125 件所在（令和 3 年（2021）3 月 31 日現在）している。

文化財保護法に基づく「国指定等文化財」が 15 件、「国登録文化財」が 13 件所在している。また福井県文化財保護条例（以下、「県条例」という。）に基づく「県指定文化財」が 32 件、市条例に基づく「坂井市指定文化財」が 59 件、また、県内では珍しい市独自の登録文化財選定により「坂井市登録文化財」が 6 件となっている。

表 2　国・都道府県・市町村指定の文化財指定等件数

区分（分類）			国指定等	県指定	市指定	国登録	市登録	合計
有形文化財	建造物		4	5	10	12	2	33
	美術工芸品	絵画	3	3	0	0	0	6
		彫刻	0	6	12	0	0	18
		工芸品	2	3	3	0	0	8
		書跡・典籍・古文書	0	2	3	0	0	5
		考古資料	0	1	1	0	0	2
		歴史資料	1	2	3	0	1	7
無形文化財			0	0	0	0	0	0
民俗文化財	有形の民俗文化財		0	0	1	0	0	1
	無形の民俗文化財		0	6	6	0	0	12
記念物	遺跡		2	3	12	0	3	20
	名勝地		1	0	0	1	0	2
	動物・植物・地質鉱物		2(※1)	3	6	0	0	11
文化的景観			0	0	0	—	—	0
伝統的建造物群			0	0	0	—	—	0
合　計			15	33	58	13	6	125

※１　国天然記念物及び名勝に指定されている東尋坊は指定順位１位の地質鉱物に含む。

※２　地域を定めない動物(コウノトリ、ニホンカモシカ、マガン、ヒシクイ)は件数に含めない。

（1）国指定文化財

本市では国指定の文化財は 15 件あり、重要文化財のうち建造物が 4 件、美術工芸品が 6 件とされている。記念物としては 5 件となっている。

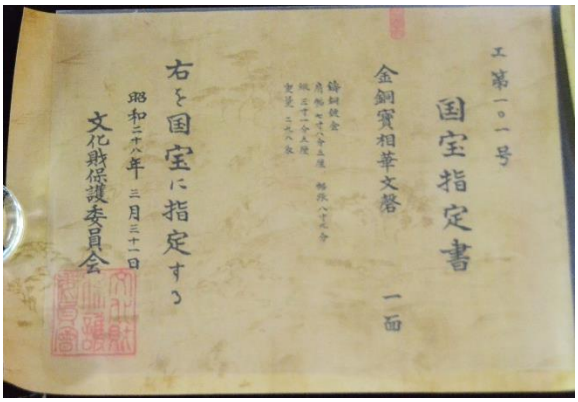
建造物には室町時代や江戸・明治時代の建物が指定され、天守、港湾施設、寺院など多岐にわたる。これらの建物が造られた背景には、九頭竜川を中心にした舟運や日本海海運の発展がもたらした本地域の繁栄ぶりがあった。また町衆や村民らが領主や寺社などを支えるだけの経済的な余裕があったことも示している。現存する県内最古の民家の坪川家住宅は、山と川に囲まれた山村集落として発展した竹田地区に所在し、後背地の山村とともに独特な自然景観をみせている。

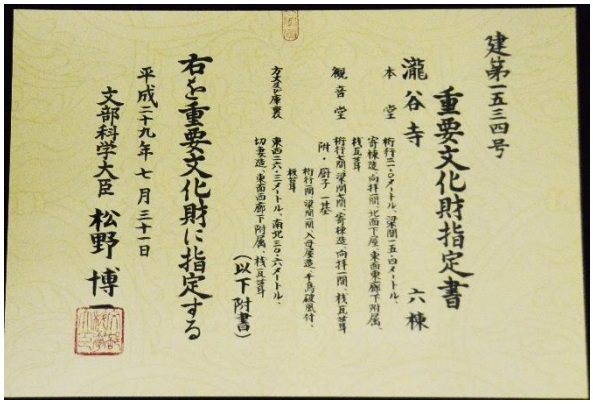
建造物では、瀧谷寺本堂・観音堂などや三国港（旧阪井港）突堤、丸岡城天守、坪川家住宅の 4 件が指定されている。

美術工芸品では、本市唯一の国宝・金銅宝相華文磬（こんどうほうそうげもんけい）の金工品や、絹本著色（けんぽんちゃくしょくたあ）他阿上人真教像（しょうにんしんきょうぞう）上人真教像、絹本著色地蔵菩薩像などの仏画のほか、全国的にも珍しい室町時代中期の天文図の天之図（星図）などの 6 件が指定されている。

史跡・名勝・天然記念物では、東尋坊は自然地形として著名で、三国港突堤にも東尋坊の岩が一部使われており、天然記念物と名勝の二重の指定を受けている。そのほか、江戸時代に築庭された滝谷寺庭園や丸岡藩が造った砲台跡、六呂瀬山古墳群、アラレガコ生息地の 5 件が指定されている。

建第九三六号
重要文化財指定書
丸岡城天守　一棟
三重三階天守　石製本瓦葺
右を重要文化財に指定する
昭和二十五年八月二十九日
文化財保護委員会


工第一〇一号
国宝指定書
金銅寶相華文磬　一面
右を国宝に指定する
昭和二十八年三月三十一日
文化財保護委員会


建第一五三四号
重要文化財指定書
瀧谷寺　六棟
本堂　桁行三〇メートル、梁間五四メートル、寄棟造、向拝間、北面工廊、東南東廂千鳥屋、桟瓦葺
観音堂　桁行五間、梁間四間、寄棟造、向拝間、桟瓦葺
附・厨子一基
桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、桟瓦葺
方丈及庫裏　東北三六・三メートル、南北二〇・六メートル、切妻造、東面西廊下附属、桟瓦葺（以下附書）
右を重要文化財に指定する
平成二十九年七月三十一日
文部科学大臣　松野博一

（２）県指定文化財

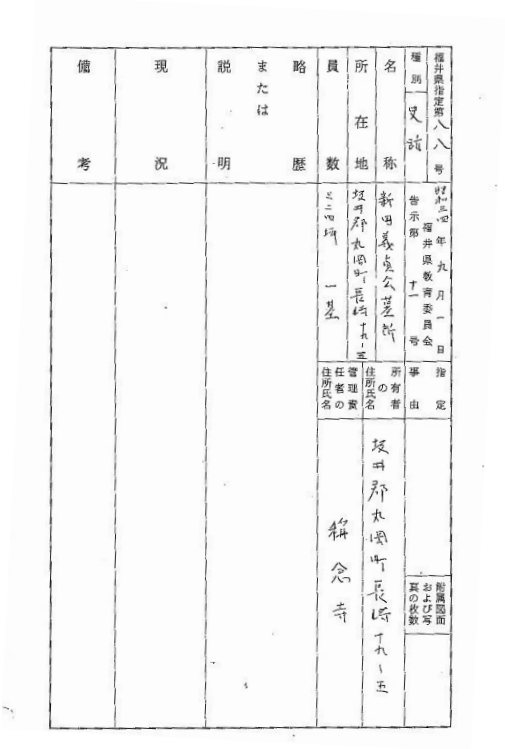
本市では、県指定文化財は 32 件あり、有形文化財のうち建造物が 5 件、美術工芸品が 15 件、無形民俗文化財が 6 件、記念物 6 件となっている。

建造物では、江戸時代の大湊神社本殿・拝殿などがある。

美術工芸品では、室町時代から南北朝時代の絵画の絹本著色白山参詣曼荼羅図などがある。また、平安時代後期から室町時代の彫刻の木造神像伊邪那岐命など、鎌倉時代の巻子本浄土三部経、南北朝時代から明治時代の書跡・典籍・古文書などがあり、主に寺社や地区で所蔵されている。

無形民俗文化財では、三國神社例大祭三国祭や日向神楽といった祭礼に関するもの、舟寄踊やなんぼや踊り唄といった盆踊りに関するもの、表児の米の稲作文化に関するもの、雄島海女の素潜り漁と加工技術の生業に関するものがある。

記念物では、史跡および天然記念物が指定されている。史跡では横山古墳群の南端に立地する 6 世紀の前方後円墳・椀貸山古墳がある。江戸時代に福井藩から厚い保護を受けたとされる称念寺には新田義貞公墓所があり、史跡に指定されている。また、藤鷲塚のフジや紀倍神社のオニヒバなど、地元の大樹も指定されている。


福井県指定第八八号

種別	史蹟
名称	新田義貞公墓所
所在地	坂井郡丸岡町長崎十九ノ三
員数	三四坪一基
略歴または説明	
現況	
備考	

昭和三四年九月一日 告示第 福井県教育委員会 才一号

指定事由

所有者の住所氏名

管理責任者の住所氏名

坂井郡丸岡町長崎十九ノ五

稱念寺

附属図面および写真の枚数

新田義貞公墓所指定書

新田義貞公墓所
（越澤会長撮影）

（３）市指定文化財

市指定文化財は 58 件あり、有形文化財のうち、建造物が 10 件、美術工芸品が 24 件、有形民俗文化財が 1 件、無形民俗文化財が 6 件、記念物が 18 件となっている。

建造物は鎌倉時代の針原八幡神社石造多層塔、信社王神社石造多層塔などがある。

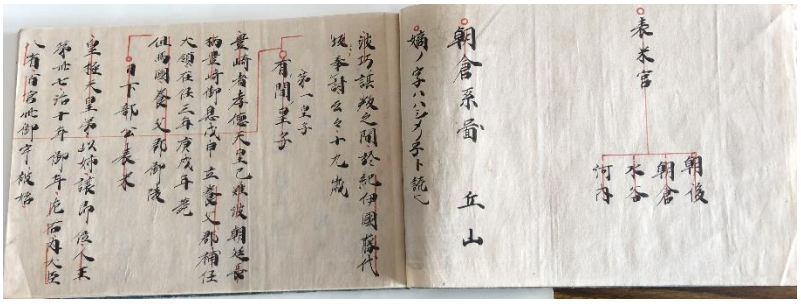
美術工芸品が 23 件と多く、そのうち 13 件は仏像・神像などの彫刻である。三國神社拝殿向拝の群猿像、三國神社木造神馬像、木造新井白石胸像は三国の彫刻師が手掛けたものである。工芸品には祭礼行事に奉納される三国祭の山車屋台 3 基が指定されている。また、三国湊の豪商であった森田家文書には、安土桃山時代から江戸時代初期の貴重な古文書がまとまって残されている。これらのような三国湊の繁栄を伝えるものが多く指定されている。

さらに、美術工芸品には本市の真宗信仰の一端を示す寄安道場関連資料や伝承に由来する黄楊の旧跡も指定されている。考古資料としては牛ケ島石棺がある。本来、古墳の埋葬施設に葬られている石棺が後世の再利用による大きな加工が行われずに保存され、指定文化財となっていることは珍しい。

有形民俗文化財は、春江町西長田にある汗かき地蔵が唯一指定されている。この地蔵は災厄を予見し、汗をかいて異変を知らせるとされ、昭和 23 年（1948）の福井地震の際にも汗をかいたといわれている。

無形民俗文化財では、いざき、海女唄、三国節といった唄に関するもの、火の太鼓、越前打ち込み太鼓といった地域に根付いた民俗芸能が指定されている。

記念物では、古墳、寺跡、藩主などの墓所のほか、地域や個人宅に伝わる樹木が指定されている。



称念寺所蔵資料　朝倉系図（越澤明会長撮影）
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館によると、称念寺所蔵の朝倉系図は、現存する朝倉系図の中では最古であり、内容も質が高いとのことである。

（４）国登録文化財

国登録文化財は 13 件あり、有形文化財が 12 件と記念物が 1 件となっている。

有形文化財には、旧岸名家住宅、坂井家住宅、魚志楼（松崎家住宅）、旧森田銀行本店、旧大木道具店店舗兼主屋や、眼鏡橋などの 12 件があり、ほとんどが三国町旧市街地に集中している。この地域は、かつて三国湊で繁栄した町並みがあり、湊町とその周辺には「かぐら建て」と呼ばれる町家が多く連なっている。登録文化財の建物は、町家、洋風建物、鉄道関連建物の 3 種類に大きく分けられる。

記念物では、坪川氏庭園が登録を受けており、江戸時代の豪農を起源とする農家の庭園である。庭園は国の重要文化財の坪川家住宅に隣接する池庭を中心として、山からの導水、菖蒲園、巨樹を含む屋敷林などにより、独特な自然環境を形成している。

魚志楼（松崎家住宅）

眼鏡橋

（５）市登録文化財

市登録文化財は 6 件あり、有形文化財が 3 件と記念物が 3 件となっている。人物の伝承に関するものも対象になっている。

有形文化財としては、上金屋（かみかなや）八幡神社と中庄（なかのしょう）神明神社に鎌倉時代の石造多層塔、石塚神社（いしづかじんじゃ）岩座（いわくら）がある。中庄神明神社の石造多層塔は本来の位置から移動しているが、石造物としての歴史的価値は高い。

記念物では、人物の伝承に関するものとして、古墳時代の継体天皇にまつわるてんのう堂、鎌倉時代の禅僧・瑩山紹瑾（けいざんじょうきん）にまつわる瑩山禅師誕生地、源平合戦で活躍した斎藤実盛にまつわる実盛池が登録されている。

（６）主な未指定文化財

未指定文化財は、現在 1,557 件が確認されている。

未指定には正月行事の左義長・どんど焼き、三国町の歳徳神（としとくしん）祭礼などの無形民俗文化財が多い。また、市の神社には多くの絵馬が残され、皮膚病に対する民間信仰を伝える「なまず」図の絵馬なども含まれる。さらに、報恩講などの宗教行事も含まれている。

市内には、文化財的な価値を有する建造物、庭園、文書、肖像画、仏像などが多く所在している。下記に、越澤会長、益田委員による考察を掲載する。

三国町東部の寺院 （益田報告・現地調査 3 寺院・2023 年 6 月 29 日午後 2 時半-4 時半）

唯称寺伽藍：真宗大谷派、桃山時代にここで創建、天明 4 年（1784）三国大火に類焼し再建したのが現存の伽藍で、本堂、書院、鐘楼、表門、表倉、塀及び基壇などが残る。本堂は、正面七間の規模の大きい真宗堂で、外陣内陣の内部は来迎柱以外すべて本山本堂同様の「立登せ柱」とするが、ここまでは京都の本山東本願寺の天明 8 年火災焼失再建工事が始まる前のものか。内外陣境の金襴彫刻欄間や梁装飾は豪華で、向拝組物や梁の装飾は華麗だが、その後かとみられる。門前石碑文「加賀山田の光教寺の光闡坊顕誓は、大小一揆により越前に逃れ布施田に草案を結び、孫の願明が教如上人の東本願寺創立に従い、寺号を唯称寺に改めてこの地に再興す。湊御坊と呼ばれた時期もあった。」（先住和尚筆か）

本堂外観・向拝組物虹梁

本堂外陣内陣・正面に金箔貼欄間彫刻
内陣（左）と外陣（上）の立登せ柱と梁組

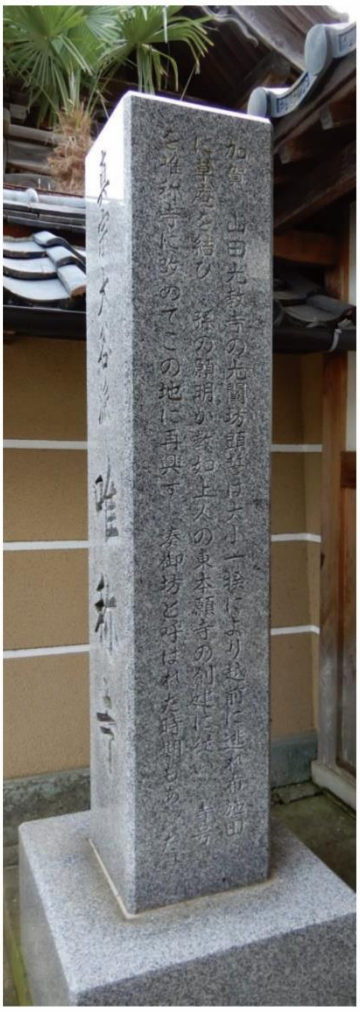
唯称寺伽藍 2

書院玄関（要内部調査）・鐘楼（要調査）江戸末期頃

表倉・（表門（ 裏側・表側）

唯称寺石碑

塀及び石造基壇



性海寺伽藍　本堂、不動堂、境内堂、天満宮本殿鳥居、表門、石反橋、石塔 2 基、森田家墓地

本堂正面・石造雨落に葵紋　　下：解説文

性海寺 しょうかいじ

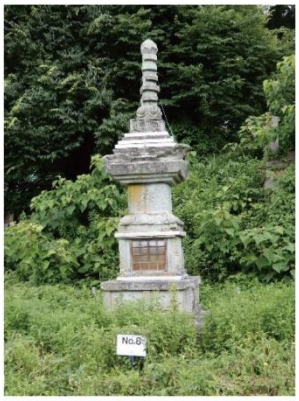
三国湊で最も古い寺院の一つ。かつてはヤブツバキが茂り、椿寺と呼ばれた。新義真言宗智山派、本尊は薬師如来。開山宗信上人が延文元年(1356)宿浦に創建。二世空信上人のとき、この地に移る。越前国主朝倉氏、福井藩主代々の祈祷所として崇められる。国重要文化財の地蔵菩薩像をはじめ、三国湊を代表する豪商森田家墓所や鞆絵漂流者供養塔などの湊の歴史を語るものが多く伝わる。

Sho-kai-ji Temple

This is one of the oldest temples in the old port town of Mikuni. It used to be called Tsubaki Temple because of the yabu-tsubaki (wild camellia) growing thick in a garden of the temple. This temple belongs to the Chisan group of the Shingi-shingon sect (of Buddhism) and its principal image is Yakushi-nyorai (Buddha of medicine). It was founded in Shubu-ura village by Rev.Shushin-syonin the in 1356. It was then transferred to this location under management of Rev. Kushin-shyonin, the 2nd. It had been worshipped as a prayer spot by Asakura family and Matsudaira family, a feudal lord of Echizen prefecture, for generations. In this temple, many assets narrating the history of this port town, such as "Image of Ksa-bosatsu (guardian deity of children)", the tomb of Morita family, one of the wealthiest merchant families in this port town, or "Dotsuo-bosyaoka-kaya-ma", a memorial monument for sailors who drifted away to Dotsuo (an area in China), have been handed down.

Photo: The tomb of Morita family

性海寺伽藍 2　森田家墓地　石塔 2 基（多宝塔・宝筐印塔）



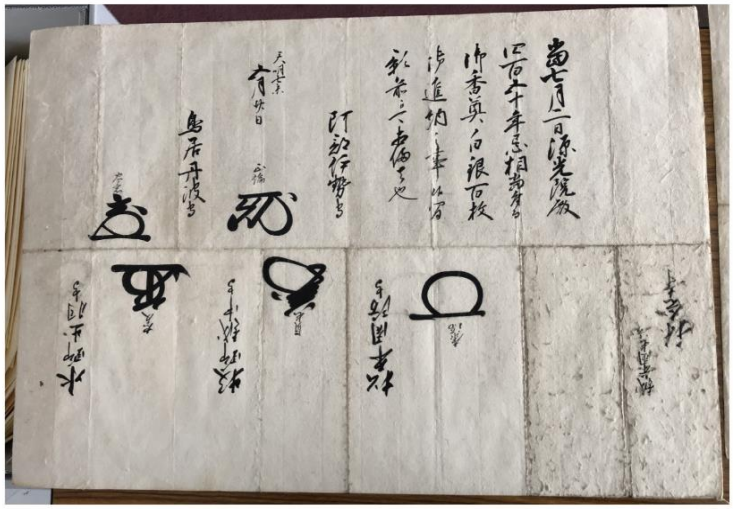
妙海寺伽藍　本堂、鐘楼門、書院庫裏、門構石造段基壇、西墓地（三国湊城跡、千手観音石像）、歌川碑

西墓地（三国湊城跡、千手観音）、歌川碑

越澤明会長により撮影された資料

称念寺所蔵資料　新田義貞・徳川家康肖像画

江戸幕府の指導で、50 年ごとに３度、新田義貞公の法要が実施され



新田義貞公 450 年忌を実施するように指示　老中五名の連署

徳川家康の肖像画と笏の持ち方が異なり独特である。徳川家康像については江戸幕府の許可がなかればできなかったと考えられる。

修復が至急必要である

白道寺所蔵資料

文化財として未調査、未指定の重要な資料が所蔵されている。

庭園は、非公開で、文化財として未調査である。本多家時代の作庭であり、文化財としての価値が高い。

（７）特産品、工芸品、菓子・料理等

三国祭の山車人形や提灯（ちょうちん）の制作などの工芸技術は、無形民俗文化財と密接に関わりながら現在まで継承されている。また、三国町安島などには、緻密な刺し目で幾何学的模様が施された刺子の着物「モッコ」がある。

また、本市は水の恵みやゆたかな平野、海など多様な自然環境に恵まれることから、四季折々の農産物や海産物などが豊富である。農産物にはメロン、スイカ、ナシなどの果物類、米（コシヒカリ）、そば、六条大麦などの穀物がある。海産物には、皇室献上品として 90 年以上続く「越前がに」をはじめ、もみわかめや甘えび、塩うになどがある。また、福井県のブランド牛「若狭牛」の最大産地である。

お盆に仏様へのお供えとして作られていたとびつき団子（地元ではとびつけ団子とも呼ぶ）や、婚礼や祭りの際に作られていたぼっかけやデンガクなどの伝統食もみられる。

越前平野は、古代より農業地帯として栄えてきた。米、蕎麦、大麦、ごぼうなどの産地として知られている。

米の著名な品種であるコシヒカリは、福井県農業試験場の石墨慶一郎が品種改良して誕生した。2021 年５月、坂井市は坂井市丸岡町舟寄に石原慶一郎の銅像を建立した。

石墨慶一郎氏銅像：銅像は丸岡町舟寄に完成。市長ら 16 人が幕を引くと、大きな拍手とともに姿を現した石墨博士像

福井県の各地域は蕎麦が名産品となっている。坂井市では集団転作対応として麦あとソバを推進した。その結果、丸岡町産のそばは風通しの良い平野部で育てられ、小粒で歯ごたえがあり香り高く、早刈りのため皮をむいた実が一般的な蕎麦の実に比べて黒味が濃い鶯色をしており、高品質な玄そばと評価される。別名を「丸岡小黒（おぐろ）」という。

また、豊かな坂井平野の稲作と水の恵みから酒造りが行われている。市内唯一の酒蔵では江戸時代から行われている。

表 3　坂井市の食文化

食材名	概　　要	地　区
花らっきょ	全国で唯一、植え付けから収穫まで足かけ 3 年をかけて栽培される。小粒で繊維が細かく、シャキシャキとした食感が特徴。	三国
そば	丸岡町は県内でも 1、2 位を誇るそば産地である。丸岡産そば粉で作った「おろしそば」は香り高く風味が強い。そばに大根おろしの汁と出汁をあわせたものをかけて食べる。	丸岡 坂井
米（コシヒカリ）	コシヒカリは昭和 31（1956）年に福井県内の農業試験場で生まれた。炊きあがりの粘りとほのかな甘みが味わえ、冷めてもおいしいお米。	市内全域
越前白茎（しらくき）ごぼう	根も葉も食べられるゴボウ。根は短く茎は白くて長い。主に茎を食べ、しゃりしゃりとした食感で茎もゴボウの味がする。	春江
六条大麦	全国一の作付面積を誇る。主に麦ごはんや麦茶に利用されている。	市内全域
若狭牛	きめがこまやかで柔らかく、霜降りの度合いのサシが密であり、風味に富んだ高級牛である。	市内全域
越前がに	冬の味覚の王者として知られる。越前がにに関する記録は 1511 年の公家日記にも記されている。坂井市で水揚げされたカニがこれまで 90 年以上、皇室に献上されている。11 月 6 日に解禁され、漁獲期間はメスのセイコガニは 12 月 31 日、オスのズワイガニは 3 月 20 日までとされている。	三国

甘えび	越前がにと並んで人気の高い珍味。独特のとろっとした食感と甘みが絶品で、生で味わうのが一番人気。4 月～10 月頃に、船尾から海底付近へ網を下ろし、船で網を曳く沖合底引き網漁で漁獲される。	三国
ガサエビ	甘えびより一回り大きい。獲れる量が少なく、鮮度が落ちやすいため、市場にはあまり出回らず、主に地元で消費される希少なえび。	三国
もみわかめ	4 月末ごろから採れる新ワカメを天日干しにし、乾いたものを手で揉んで仕上げる。瓶詰めにして販売される。	三国
塩うに	バフンウニの塩漬けのこと。日本 3 大珍味のひとつとされる。江戸時代後期の書物『日本山海名産図会』でも記載されている。ウニ漁は 7 月中旬に解禁され、約 2 週間で終了。海女が素潜りで採ったウニを手作業で割り、中身を塩漬けにする。	三国
酒まんじゅう	三国地区を代表するお菓子のひとつ。江戸時代に往来した北前船の船乗りたちから製法を学び、今に伝えられているという伝統の深い和菓子。もち米と米麹が種原料の甘酒を熟成させ、小麦粉を混ぜた種が特徴。ほどよく膨らんだら蒸し、最後にそれぞれの店の焼き印を押す。祭りや婚礼の祝い菓子としても重宝される。	三国
日本酒	豊かな坂井平野の稲作と水の恵みから酒造りが行われている。市内唯一の酒蔵では江戸時代から行われている。	丸岡 坂井
豊原のそうめん	江戸時代の『国乗遺聞（こくじょういぶん）』（江戸後期）や『明智軍記（あけちぐんき）』（元禄 15 年（1703））などには豊原のそうめんについて、当時の産物や名物であると記載されている。現在はイベントの時などにふるまわれる。	丸岡

表 4 坂井市の伝統食

食材名	概　　要	地　区
とびつき団子	団子にささげをつけたもの。もともとはお盆に仏様へのお供えとして作られていた。現在は菓子店などで販売されている。あわら市本荘地区でも作られている。	三国 坂井
ぼっかけ	ごぼうやこんにゃく、油揚げなどを入れたごぼう汁を御飯にかけたもの。坂井町兵庫地区では結婚式に食べていたが、現在、結婚式では食べない。春江町では御飯にはかけず、ごぼう汁のままで食べる。	春江 坂井

葉っぱ寿司	8～9 月に作られる。各家庭にアブラギリの木が植えられ、嫁入りの際にも木を持っていく慣習があるという。鱒を甘酢に浸けてアブラギリの葉で包む。8 月の夏祭りなどにもお供えする。永平寺町にも同様の寿司が伝わっている。	丸岡 春江
魚の塩炒り	カレイ、ハタハタ、イワシ、メギスなどの小魚を、塩を入れて茹でたあと軽く炒ったもの。	三国
デンガク	清永のデンガクと言われる程、清永の婚礼時にはつきもので、ハタハタを炭火で焼き、砂糖と味噌のたれをつけてふるまった。現在はコミュニティセンター祭りなどのイベント時に作る。	坂井
報恩講料理	浄土真宗信仰が広く浸透しており、講の食事が古くから伝わっている。（麩のからしあえ、油揚げの煮物など）	市内全域
なとみそ	塩漬けにしたナスを塩抜きして麹漬けにしたもの。	三国

（８）三国湊と北前船

三国湊は、中世・戦国時代には、「三津七湊」という全国の 10 か所の重要な湊の一つとして知られていた。江戸時代になると、日本海における北前船の海運ルートが開発され、江戸時代の幕藩体制では、日本海沿いに領地を持つ藩の数がかなり多くなった結果、北前船の寄港地が数多く整備された。

平成 29 年に日本遺産として、「北前船寄港地」が認定された。認定された自治体は下記のとおりである。

「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」

北前船寄港地・船主集落を中心としたストーリーで、平成 29（2017）年度に認定されていたものに平成 30（2018）年度に追加認定された。複数の市町村にまたがってストーリーが展開されている。

【認定自治体（◎印は代表自治体）】

山形県（◎酒田市、鶴岡市）、北海道（函館市、松前町、小樽市、石狩市）、青森県（鰺ヶ沢町、深浦町、野辺地町）、秋田県（秋田市、にかほ市、男鹿市、能代市、由利本荘市）、新潟県（新潟市、長岡市、佐渡市、上越市、出雲崎町）、富山県（富

山市、高岡市)、石川県（加賀市、輪島市、小松市、金沢市、白山市、志賀町)、福井県（敦賀市、南越前町、坂井市、小浜市)、京都府（宮津市)、大阪府（大阪市、泉佐野市)、兵庫県（神戸市、高砂市、新温泉町、赤穂市、洲本市、姫路市、たつの市)、鳥取県（鳥取市)、島根県（浜田市)、岡山県（倉敷市、備前市)、広島県（尾道市、呉市、竹原市)、香川県（多度津町）

【ストーリーの概要】

日本海や瀬戸内海沿岸には、山を風景の一部に取り込む港町が点々とみられる。そこには、港に通じる小路が随所に走り、通りには広大な商家や豪壮な船主屋敷が建っている。また、寺社には奉納された船の絵馬や模型が残り、京など遠方に起源がある祭礼が行われ、節回しの似た民謡が唄われている。

これらの港町は、荒波を越え、動く総合商社として巨万の富を生み、各地に繋栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落で、時を重ねて彩られた異空間として今も人々を惹きつけてやまない。

（９）坂井市百景

坂井市では、坂井市都市計画課が担当課となり、市の魅力をアピールするとともに景観に対する市民の高揚を図るため、「坂井市百景」の募集を行い、坂井市景観委員会の審議を経て、百景を選定した。その内容は下記のとおりである。分類は眺望・風景、水辺、緑・公園、歴史・暮らし・文化、建造物・施設・ランドマーク、祭り・行事の６分類である。

表５　坂井市百景一覧

分類	番号	名称	摘要	地区
眺望 風景	1	東尋坊	特選資源	三国
	2	嵩の田園と梶の里山	身近な景観資源	三国
	3	雄島	特選資源	三国
	4	加戸小学校から望む坂井平野	身近な景観資源	三国
	5	六呂瀬山古墳群と古墳群下からの眺望	身近な景観資源	丸岡
	6	丈競山	身近な景観資源	丸岡
	7	そば畑	身近な景観資源	丸岡
	8	田園風景	特選資源	坂井
	9	九頭竜川堤防からの眺望	身近な景観資源	坂井
	10	えちぜん鉄道と田園風景	身近な景観資源	坂井
水辺	11	荒磯遊歩道	特選資源	三国
	12	大堤（通称：鴨池）	身近な景観資源	三国
	13	竹田川渓谷	身近な景観資源	丸岡
	14	小和清水	身近な景観資源	丸岡
緑 公園	15	嵩のひまわり畑	身近な景観資源	三国
	16	はなしょうぶ園と千古の家	特選資源	丸岡
	17	たけくらべ広場	身近な景観資源	丸岡
	18	女形谷のサクラ	身近な景観資源	丸岡
	19	福井県総合グリーンセンター	身近な景観資源	丸岡
	20	竹田水車メロディーパーク	身近な景観資源	丸岡
	21	吉澤家庭園	身近な景観資源	春江
	22	江留上防災公園	身近な景観資源	春江
	23	旧島崎邸	身近な景観資源	春江
	24	藤鷲塚のフジ	身近な景観資源	春江

	25	ゆりの里公園	身近な景観資源	春江
	26	エンゼルランド	身近な景観資源	春江
	27	木部ふれあい公園	身近な景観資源	坂井
	28	新庄地区ふるさと花壇	身近な景観資源	坂井
歴史 暮らし 文化	29	三国港（（旧阪井港）突堤を含む）	身近な景観資源	三国
	30	町屋の見える街なみ	身近な景観資源	三国
	31	中野重治生家跡	身近な景観資源	丸岡
	32	称念寺	身近な景観資源	丸岡
	33	鳴鹿御野立所	身近な景観資源	丸岡
	34	丸岡城	特選資源	丸岡
	35	てんのう堂	身近な景観資源	丸岡
	36	紀倍神社	身近な景観資源	坂井
	37	京福線高架跡	身近な景観資源	坂井
	38	お早良作慰霊地蔵	身近な景観資源	坂井
	39	春日神社	身近な景観資源	坂井
建造物 施設 ランドマーク	40	みくに龍翔館	特選資源	三国
	41	丸岡スポーツランドと健康施設	身近な景観資源	丸岡
	42	鳴鹿大堰	身近な景観資源	丸岡
	43	坂井市立春江東小学校	身近な景観資源	春江
	44	春江町複合高架水槽（通称：給水塔）	身近な景観資源	春江
	45	ＪＲ北陸本線の線路	身近な景観資源	坂井
	46	ＪＲ丸岡駅	身近な景観資源	坂井
	47	えちぜん鉄道下兵庫駅	身近な景観資源	坂井
祭り 行事	48	三国花火	特選資源	三国
	49	雄島祭り	身近な景観資源	三国
	50	蓮如上人御影道中	身近な景観資源	丸岡